

現代厦門語の子音体系に関する一研究

一 日本語との比較

朱 新建

目次

0. はじめに
1. 先行研究
2. 両唇音 [p][p′][β][m][ɸ]
3. 歯茎音 [t][t′][d][n][s][ts][ts′][l][r]
4. 歯茎硬口蓋音 [tʃ][tʃ′][ç][ɲ][ʈ]
5. 硬口蓋音 [ç][ɲ]
6. 軟口蓋音 [k][k′][g][ŋ]
7. 声門音 [h]
8. 音節末子音 [m][n][ŋ][p][t][k][ʔ]
9. 音節主音 [ʈ][ɰ]
10. おわりに

[付表]厦門語子音分布表

・主要参考文献・

羅常培, 1956, 『厦門音系』 (科学出版社)

董同和, 1957, 『厦門方言の音韻』 (中央研究院歷史研究所集刊)

袁家驊, 1960, 『漢語方言概要』 (文字改革出版社)

中嶋幹起, 1977, 『閩語東山島方言基礎語彙集』 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

詹伯慧, 1981, 『現代漢語方言』 (湖北人民出版社)

鄭張尚芳, 1995, 『浙西南方言的tç声母脫落現象』 (『吳語和閩語的比較研究』上海教育出版社)

0. はじめに

厦門語とは、現在の厦門市の開元区と思明区の両区で話されている狭義の厦門語とそれ以外の厦門市の区と厦門市の郊外で話されている広義の厦門語とがあるが、本稿で言う厦門語は前

者の狭義の厦門語のことであるが、厦門市の人々が言う厦門語も前者を指す。

厦門語の音声と音韻に関する研究は歴史を溯れば、十八世紀末に泉州の黄謙の『彙音妙悟』とその後漳州の謝秀嵐が編集した『雅俗通十五音』、いわゆる「閩語十五音」がある。しかしこれは、閩語(主に泉州語、漳州語、厦門語など)の研究の中に垣間見る厦門語の研究であるに過ぎなかった。アヘン戦争の後、南京条約により五港を開港することになり、上海、広州、福州、寧波と一緒に、厦門は「五口通商」の通商港の一つとなった。通商と布教の為に相次いで厦門を訪れた宣教師たちは、当然のように厦門語の研究に注意を払った。中では重要なものは次の二冊の辞書である。1899年に出版のCarstairs Douglasの『厦門白話字典 (Chinese-English Dictionary of the Vernacular or Spoken Language of Amoy)』と1913年に出版したW. Campbellの『厦門音新字典 (A Dictionary of the Amoy Vernacular)』である。その後1920年に、周辨明などによって「厦語社」が創設され、「音声学に従い厦門語の音と字を制定し、これを推しひろげ」、「厦門語で以て厦門語地域において文化運動を起こし、教育を普及させ、民衆の知識を増進させよ」という宗旨のもとで、『厦語入門』、『衛生講話』、『厦語短編小説』と定期出版物『指南針』を出し、厦門語の研究を本格化した。ただし、これは本稿の直接論ずる対象ではないので、別の機会に譲ることとする。

本稿で言う「現代厦門語の研究」の時期は羅常培の『厦門音系』発表以後の時期と定めたい。羅常培の『厦門音系』はすでに1931年に出版されたが、その後は戦争と内乱で中国国内での厦門語の研究は空白に近い状態だったので、1950年代から(羅常培の『厦門音系』の再版をきっかけに)現在に至るまでの期間を「現代厦門語研究」の期間とする。なお、本稿で挙げる語例はすべて1987年以後に採録した被験資料に基づいたものである。

羅常培の『厦門音系』は現代厦門語の音声体系に関する先行研究の中では權威的な論著であるが、本稿は羅常培の1956年再版の『厦門音系』を取り上げ、年代別にその他の先行研究の成果も踏まえながら、厦門語の子音体系について論じることとする。

1. 先行研究

羅常培は『厦門音系』の中で、厦門語の子音体系を下記のように示している。

厦門的語音					羅常培1956,『厦門音系』 p7より		
p	悲	p'	披	b	糜	m	盲
t	知	t'	緇	l	離	n	連
k	飢	k'	欺	g	宜	ŋ	硬
ʔ	伊						
						h	義
ts	渣	ts'	差			s	紗
tʂ	支	tʂ'	痴	dʂ	兒		(詩)

上記の表は、縦は調音法を示し、横は調音点を示していることがわかる。これは中国伝統的な音声表記法であり、今でも援用されている。

上記の羅常培の説(以下は羅説と略す)では、厦門語の子音体系は20個の子音でまとめられている。「聲母」とは一般的に中国語の音節初頭子音を指すが、声門閉鎖音の[ʔ]についてだけ、羅説は、「単用の韻母の前か話音の入声の韻尾に往々にしてこの子音が存在する」と示している。すなわち、この声門閉鎖音の[ʔ]は音節初頭子音と音節末子音の両方にたつということである。本稿ではこの声門閉鎖音の[ʔ]については音節末子音としてのみ扱うことにする。そして[ɿ]については羅説では破裂的な性質をもつ音であると分析され、破裂音の欄に置き、これは後の研究に大きな影響を与えたところでもある。

上記羅説の子音表では厦門語の子音体系を20個の子音をもって精密に分析され、特に破擦音の口蓋化音を明示している点では羅説の特徴であり、羅説以前の先行研究に見ない成果でもある。羅説が後の厦門語の音声の研究に權威的な地位に在り続けた理由でもある。

しかし、羅説には下記のような不備があることを指摘しなければならない。

その一、羅説の表記では、[b]と[m]、[ɿ]と[n]、[g]と[ŋ]は対立をなしているように見え、音韻論的には[b]と[m]、[ɿ]と[n]、[g]と[ŋ]は相補分布をなしているという厦門語の特徴を示されていない。音声学的に見ても、[b]と[m]、[ɿ]と[n]、[g]と[ŋ]は密接な関係にあり、全く異なる音ではないことは本稿の後述のとおりである。

その二、羅説では、破擦音[ts]と[tsʰ]の口蓋化音は示されているが、摩擦音[s]と[h]の口蓋化音は示されていない。

その三、羅説では、有声の破擦音の口蓋化音[dʒ]が示されているが、この音は現代厦門語には存在しない。

その四、羅説では、[b]、[ɿ]、[g]は有声の破裂音であると示されているが、後述のように、この3つの音とも有声音であることには異議はない。しかし、それは有声の破裂音ではなく、有声の入破音[β]、[ɗ]、[g̊]である。

その五、[ɿ]についての記述である。これは羅説の成果でもあり、後の研究に最も大きな影響を及ぼした記述でもある。しかし、羅説のこの記述では、上記四に指摘した入破音[ɗ]の音声と、後述の弾き音の[t̪]と[r̪]及び側面音の[l̪]が厦門語に存在しながら、これを引っくりめて破裂的側面音[ɿ]であると記述されていた点は、羅説まで指摘されなかった現代厦門語のこの音声事実が羅説の後も長い間明らかにできない障害にもなったわけである。

上記の羅説の不備については不完全ながら後に少しずつ修正されてきたその他の先行研究を年代の順を追って代表的なものを下記のように示しておく。

まず、1950年代では、董同和1957の『厦門方言的音韻』を挙げることはできる。下記のように厦

門語の子音体系を示している。

	董同和1957,『厦門方言的音韻』p232より			
	全清	次清	濁	清擦
唇	p	p'	b/m	
舌尖	t	t'	l/n	
舌葉	ts	ts'	dz	s
舌根	k	k'	g/ŋ	
喉				h
	○			

上記のように董同和1957(以下は董説と略す)では、音韻論的に厦門語の子音を分析されている。表の「喉」(声門音)の欄には羅説の「?」がなく、下に「○」が示されている。「○」はゼロであり、ゼロ声母と言い、すなわち音節初頭子音がないことを示している。羅説の「dz」を「dz」で表記しているところは依然として問題を残している。しかし、[b]と[m],[l]と[n],[g]と[ŋ]の3組の音をb/m,l/n,g/ŋと表記したことで、この3組の音の関係はよく表され、評価すべき成果である。しかし、この3組の音の実態は記述の上ではまだ明らかにされていない。

次は1960年代では袁家驊1960の『漢語方言概要』を挙げるができるが、その中の厦門語の子音表を以下のように示す。

厦門音系		袁家驊1960,『漢語方言概要』p243より	
声母表			
双唇音	p 悲 p' 披 b 糜 (m 盲)		
舌尖音	t 知 t' 緇 l 離 (n 連)		
舌根音	k 飢 k' 欺 g 宜 (ŋ 硬)		
喉 音	ʔ, ○ 伊		h 義
舌葉音	ts 渣 ts' 差 (dz 而)		s 紗
	(tʃ 支) (tʃ' 痴) (dʒ 兒)		

袁家驊1960(以下は袁説と略す)では、「喉音」(声門音)の欄に羅説の「?」と董説の「○」(ゼロ)を援用して表記されている。そして「舌葉音」(齒茎・硬口蓋音)の欄に羅説の「dz」を「dʒ」に、そして董説の「dz」と一緒に挙げている。袁説は()を用いて異音を表すところに特徴がある。

しかし、袁説では[ts],[ts'],[dz]の口蓋化音を表記したものの,[s]の口蓋化音[ɕ]の記述が見当たらず,[h]の口蓋化音の記述も見当たらない。そして,[ts],[ts'],[dz]の口蓋化音をそれぞれ硬口蓋齒茎音の[tʃ],[tʃ'],[dʒ]と表記しているところは、実際の音声とはかけ離れており、不適切である。むしろ羅説の齒茎硬口蓋音の[tɕ],[tɕ']の表記は調音点の記述が精密であり、的

確である。

以上は50年代,60年代の主な先行研究を見てきたが,周知のように,1960年代中期から1970年代後半までは,中国国内でいわゆる「文革」という政治運動が起きていたため,厦門語の研究はおろか,すべての分野にわたって学術に関する研究らしい研究は見られなかった。少なくとも関係研究の出版物は見当たらない。そこで,直接的に厦門語の研究ではないが,関連研究では中嶋幹起1977の『閩語東山島方言基礎語彙集』を挙げることができる。このほか,中嶋の『福建語におけるいくつかの音声的特徴』(アジア・アフリカ言語文化研究4)や『福建語の頭子音について』(アジア・アフリカ言語文化研究6)を挙げるができる。これは閩南方言台湾語について論じられたものであるが,厦門語の研究に有用であるので,併せてそれぞれを以下のように示しておく。

A表 東山島方言の音韻体系 中嶋『閩語東山島方言基礎語彙集』p20より

p	p'	b	m
t	t'		n l
c	c'	z	s
k	k'	g	ŋ
?		h	

B表 福建語の声母 中嶋『福建語におけるいくつかの音声的特徴』p144より

p	t	k	?
p'	t'	k'	
b	l	g	
	ts	ts'	
	ts'	ts'	
	dz	dz'	
	s	ɬ	h
m	n	ŋ	

C表 現代福建語(台湾語)の頭子音 中嶋『福建語の頭子音について』p76より

p	p'	b	m
t	t'		n l
		<u>d</u>	
ts	ts'	s	dz
tɕ	tɕ'	ɕ	dz'
k	k'	g	ŋ
?		h	

D表 頭子音の音韻体系 中嶋『福建語の頭子音について』p80より

/ p	p'	b	m
t	t'	n	l
		d	
c	c'	s	z
k	k'	g	ŋ
・	h	/	

上記の中嶋説では、C表とD表でそれまでの先行研究に見られない[d]の記述がはじめて示されている。特に、[d]と[l]をそれぞれ独立した音素として/d/と/l/をたてたことはこれまでの先行研究を越えた成果である。音声そのものの記述としてはまだ問題を解決していないが、大きな進歩である。例えば、中嶋『福建語におけるいくつかの音声的特徴』では、

「一般に台湾人は日本語のグ行音をうまく発音できず、^{コドモ}〈子供〉を^{コロキ}〈衣〉、^{デンキ}〈電気〉を〈レンキ〉のように発音する。これは[d]をもっていないことを示すものである。」

としながらも、音素としては/d/をたてている。台湾語の記述ではあるが、lの音声は後述のとおり、弾き音[r], [ɬ]と側面音[l]が観察されており、b, d, gは有声の入破音[β], [ɗ], [g]である。これは厦門語だけではなく、東山島方言や台湾語をはじめ、泉州語、漳州語などすべての閩南方言が共有する音声現象であると筆者は考える。

1980年代に入ると、中国では改革開放を掲げて、経済の面だけではなく、学術研究の分野でも今までにない活気が見られた。詹伯慧1981の『現代漢語方言』を挙げることができる。

詹伯慧1981(以下は詹説と略す)では厦門語の音声を音韻論的に下記のようにまとめられている。

		声母(14個)		詹伯慧1981,『現代漢語方言』p188より	
双唇	p	平	p'	頗	b 門 (m) 盲
舌尖	t	知	t'	他	d 男 (l) (n) 拿連
舌葉	ts	曾	ts'	出	s 時 (dz) 入
舌根	k	球	k'	可	g 語 (ŋ) 雅
喉音	○	英			h 喜

(注:上記では原文の例字を一部省略した)

詹説では、/b, d, g/を音素にたてて、[m], [l], [n], [ŋ]をそれぞれの異音とした。特に、lとdについてはそれまでの先行研究とは下記のように違う分析をなされている。

「側音lは厦門語の中でもすでに閉鎖音dと併合し、l-はd-の異音であると認めてもよい。」しかし、詹説もb, d, gについてはその閉鎖性が弱く、鼻音性をもっていると指摘したにとどまっておき、それ以上の分析はなされていない(詹伯慧1981p188を参照)。

このように、羅説以後の先行研究は羅説の成果を援用し、羅説の不備を修正しながらより精密で且つ正確な記述を試み、よい成果を収めたことは上記のとおりであるが、入破音などの記述の問題は未解決のままである。

以上見てきたように、50年以上にわたる厦門語の子音体系の研究は大きな成果を挙げながらも、まだ少なからぬ記述の問題を今日までに残している。ここでは先行研究の成果をふまえ、援用させてもらいながら、厦門語の子音体系について、筆者の研究結果を下記のようにまとめてみることにする。

なお、先行研究では別問題にされた音節末子音p, t, k, ʔ, m, n, ŋを併せて表記しておく。

厦門語の子音体系表

調音点 調音法		頭 子 音					末子音 と 主音的子音
		両唇音	齒茎音	齒茎・硬口蓋音	軟口蓋音	声門音	
破裂	無気音	p	t		k		p t k ʔ
	有気音	p'	t'		k'		
入破音		β	d		g		
鼻音		(m)	(n)	(ŋ) (ɲ)	(ŋ)		m n ŋ ɱ ɳ
摩擦	無気音		ts	tʃ			
	有気音		ts'	tʃ'			
摩擦音		(ɸ)	s	(ɕ) (ç)		h	
側面音			l				
弾き音			(ɾ)	(ɽ)			

(注: () 内は異音であることを示す。)

上記の先行研究を念頭におき、羅説を取り上げて、先行研究の記述を援用し批判を加え、北京語や日本語などと比較しながら厦門語の子音を分析していくことにする。

2. 両唇音 [p], [p'], [β], [m], [ɸ]

厦門語の両唇音の特徴は、まず調音点は北京語よりも日本語のそれに似ているし、日本語にあり、北京語にない両唇摩擦音[ɸ]が厦門語にも存在する。そして入破音[β]が存在することは、厦門語の子音の特徴である。

[p] [p]は無声無気の両唇破裂音である。IPAの[p]の無気音である。

[p]については羅説では、

フランス語のp音より少し軟化しているが、北京語の「北」や丹陽の「傍」の発音のように[b]になるほど軟化していない。

としているが、これについて中嶋説では、

北京・丹陽にくらべて厦門方言のそれがfortisであるとの聴覚印象を与えるのは、
喉頭化の程度の差によるものであると思われる。

と指摘されている。

これについてはまず、羅説の北京語の「軟化」であるが、この「軟化」はすなわち有声化のことである。中嶋説のいわゆる「喉頭化」も北京語の有声化を指していると思われるが、ただ、普通「喉頭化」や「喉腔化」は無声音であるため、厳密的には北京語の「軟化」は「有声化」のことである。北京語には有声の破裂音は存在しないものの、無声無気の破裂音が有声化する現象はよく観察される。例えば、北京語の「比較[pi³ tɕiao⁴] (比較)」や「車把[tɕʰy¹ pa³]」などの[p]は声調の関係(いずれも低平調の第3声である)もあって、[p]が[p̚]へと有声化し、更に有声音の[b]となって発音されることもある。これは、有声音は普通声門を閉じて調音するが、北京語の無声無気音も一般に声門を閉じて調音するため、無声無気音の有声化が起きる原因の一つであると考えられる。日本語にも無声の無気音が観察されるが、普通、声門が開いたまま調音するところは北京語のと根本的に違う(服部四郎1984『音声学』p113を参照)。これについては、日本人学生が北京語の無気音を学習する例を見てもわかる。日本人学生が北京語の無気音をなかなか習得できないのは、主な原因は声門を閉じて発音できないからである。声門が開いているか閉じているかを自覚させるには、舌が歯茎についているか硬口蓋についているかを自覚させるよりもはるかに難しいことを、筆者自身も経験済みである。北京語の無気音をうまく発音できない学生に、日本語の濁音のようにと、すなわち有声音のように発音しなさいと、そして北京語では無声の無気音と有声音は日本語の濁音と清音のように区別しないからと説明を加えてよく発音指導をしたものである。

しかし、厦門語の無声無気音が調音の際、声門がある程度開いているため、北京語のような有声化は起きにくい。これは厦門語話者が日本語の発音を学習する際の誤用例を見てもわかるように、北京語話者が日本語の濁音を清音の無気音で代用する一方、日本語の清音を濁音のように発音したりする間違いも観察されるが、厦門語話者が日本語の濁音を清音の無気音で代用する間違いがあっても、日本語の清音を濁音のように発音する間違いはほとんど観察されない。

もう一つ、羅説と中嶋説とも触れていない調音点に関する問題がある。北京語の無声無気の破裂音[p]の軟化は、声門の開閉に関係するほか、両唇の開鎖の強弱にも関係する。北京語の無声無気音は有声が無声かよりも、息さえ出さなければよいわけであるので、有気音のように口腔内の気圧を高めて調音する必要は全くないため、両唇に力を入れて開鎖を形成する努力も要らない。これは有声の両唇音についても言えることであるが、北京語の[p]の両唇の開鎖は[b]と同じぐらい弱いことがわかる。したがって、厦門語の[p]はフランス語の硬音(fortis)ほど両唇によ

る閉鎖が強くないが、北京語の軟音(lenis)よりは両唇による閉鎖が強いわけである。

一方、日本語の語中のバ行音の子音にも無声無気の破裂音 [p] が観察できる。例えば「一杯[ip:ai]」や「一匹[ip:ki]」、「一服[ip:ukw]」、「一兵[ip:ei]」、「一方[ip:o:]」などに見られる[p]がそうである。日本語のこのような無声無気の[p]は廈門語の[p]とは非常に似ている。廈門語の[p]の語例を下記のように示す。

語例	本来	[punlai]	(本来)	不三不四	[pusanpuɕi]	(怪しげな)
	布碎	[pots'ui]	(布切れ)	冰櫃	[pɪntu]	(冷蔵庫)
	放尿	[panhjo]	(小便をする)	波菱菜	[pelɪŋts'ai]	(ホウレン草)

ただし、日本語のバ行音のような有声無気の両唇破裂音[b]が廈門語には存在しないため、廈門語話者が日本語のバ行音を学習する際、例えば、アルバイト[arɯbaito]を[arɯpaito]、貧乏[bimbo:]を[ɕimpo:]のように発音したりして、廈門語の無声無気の両唇破裂音[p]で日本語のバ行音の有声無気の両唇破裂音[b]を代用する間違いが観察される。

[p'] [p']は無声有気の両唇破裂音である。IPAの[p]の有気音である。

[p']は羅説によると、英語のpに近い音であり、中国語のほとんどの方言のp'と同じ音である。

廈門語の無声有気の両唇破裂音[p']は調音の際、両唇に力を入れて閉鎖を形成し、口腔内の気圧を高め、破裂の際、肺からの呼気が勢いよく口唇を破って流れ出る。[p']は廈門語の両唇音の中では、一番口唇に力を入れて調音する発音である。これは北京語の「害怕[xaɪp'a] (怖い)」や「破壊[p'oxuai] (破壊)」, 「批判[p'ip'an] (批判)」などの[p']とは同じ音である。日本語では、「パパ[p'apa]」や「ピンポン[p'impon]」、「ページ[p'e:ɕɕi]」などの語頭のバ行音の子音も普通、有気音の[p']であるが、廈門語の[p']はこのような語頭に見られる日本語の有気音の[p']よりは口腔内の気圧が高いため、破裂の際、出渡りに強い呼気が流れ出て、量も多い。ただし、日本語の会話の中の、「パーッと行こう」の「パ」の子音[p']はかなり出渡りの呼気が強く、気流の量も多いので、廈門語の[p']とは非常に似ている。廈門語の[p']の語例を下記に挙げる。

語例	拍官司	[p'akuənɕi]	(訴訟する)	打獵	[p'araʔ]	(狩猟)
	弄破鼎	[lɔŋp'atɪa]	(釜を壊す)	皮蛋	[p'itan]	(ピータン)
	浮有	[p'up'ä]	(おろそか)	酒配	[ɕɪup'e]	(肴)

[6] [6]は弱有声無気の両唇の鼻音性入破音である。IPAの[6]とは似ている音であるが、鼻音性の入破音であるので、後続する鼻母音の影響で鼻音化する点では違う。

[6]の記述は今までの先行研究には見当たらない。羅説ではこの音を「両唇の有声無気の破裂音」[b]であると記述し、下記のように示されている。

ただし、両唇の接触は軽く、破裂の力は弱い。英語のb音よりずっと軟化している。

うっかりすると、mの音と混同して聞こえることがよくある。

羅説の記述では入破音の[b]の記述が見られなかったものの、[b]の音は破裂が弱く、鼻音性のあることは指摘された。そして、董説でも、「bは軟音であり、時にはやや鼻音成分をもつ」と指摘された。

一方、袁説では上記と同じ指摘をしながら、更に、bは「吳方言のやや帯気のb', g'の音色とは明らかに異なり、湘方言のb, gとほぼ同じである」と指摘している。

これについてはむしろその逆である。湘方言の[b], [g]は純粹の有声の破裂音であり、筆者の母語である永州方言は湘方言の下位方言であるが、永州方言の[b]は純粹の両唇有声音であり、厦門語の[b]とは全く違う音である(朱1995『中国語永州方言の音声』を参照)。吳方言にこそ、厦門語の[b]と同じ音が存在する。鄭張1995によると、

浙江省南部の八つの県に有声の先声門閉鎖音ʔb, ʔdが存在する。(中略)この子音はまた上海の郊外県にも観察される。趙元任1928は松江と浦東の南匯にとの報告があり、袁家驊など1960は浦東の川沙を追加した。復旦大学吳語研究室の調査によると、奉賢、金山、嘉定、上海県及び市街区の老派にも有声の先声門閉鎖音が存在すると判明した。例えば、「疤、帶」は金山、永嘉ともʔbo¹, ʔda⁵と読む。

先声門閉鎖音ʔb, ʔdの最大密集地は古百越地区の西端であり、海南の閩南方言以外に、広くチワン族の諸言語に分布しており、(中略)このほかタイ語、ラオス語……ベトナム語などもそうである。(中略)浙江省南部、上海吳語のʔb, ʔdは陰調であるが、海南の閩南方言やチワン諸言語のʔb, ʔdも同じく陰調である。(鄭張1995, p67を参照)

と示されている。鄭張1995(以下は鄭張説と略す)の「有声の先声門閉鎖音ʔb, ʔd」とはすなわち有声の入破音[b]と[d]を指す。梁猷剛1964『海南方言中的喉塞音』ではこの音をʔb, ʔdと表記し、そして梁猷剛1958年の『海南島海口方言中的吸氣音』のb, dとは同じ音であると示されている(『中国語文』1964年第6期p463を参照)。

なお、海南島の海口・文昌方言の入破音と厦門語の入破音との関係についてはすでに朱1995の『中国語海口・文昌方言に見られる入破音について—厦門方言との比較研究』(愛知学院大学教養部紀要1995年第43巻第1号を参照)で述べたとおりである。

そこで、下記は入破音に関する文献を引用し、入破音の記述を明らかにしていく。

A. ベルティル・マルンベリ著、大橋保夫訳、1976、『音声学』p39

声門を閉鎖したまま喉頭全体を下げ、そのとき生ずる気流によって発せられる音。アフリカの諸言語に広く用いられる。

B.服部四郎,1984,『音声学』p116

[b]の構えをしながら頬をふくらませないで声帯を振動させようとする、喉頭全体が下る運動をするのが認められる。この場合には、喉頭の下行運動によって生ずる気流によって声帯が振動するというような結果となる。このような方法によって発せられる「有声入破音」をPikeは[bʔ][dʔ][gʔ]で表している。(p119の注：国際音声字母の[ʔ][dʔ][gʔ]などで表すSindhi語およびBantu語のvoiced implosivesはこの音であろう)

同p168の補説

「有声入破音」の調音の記述は、Pikeのそれとしては誤っている。……次のように改める。

この[b]の閉鎖をそのままにしておいて、口むろに溜まった空気を逆に肺の方へ吸いこむ際に生ずる気流で声帯を振動させることができる。このような逆の気流で生ずる不完全な声を持続部にともなう破裂音をPikeはvoiced implosives《有声入破音》と呼び[bʔ],[dʔ],[gʔ]で表している。

ただし、私が116頁に記述したような音も存在する……。

同『音声学カセットテープ テキスト』p35

p.116, ここに記述した有声入破音[bʔa][dʔa][gʔa]

p.116, 私が海南島の方言の話し手から習得した有声入破音。

[ʔa] [ba]

[ʔa] [da]

C.城生佑太郎,1988,『音声学 新装増訂版』p78

声門を閉鎖しておいてから放出音とは逆に、口むろに溜まっている空気を呑み込むようにして調音する。ただし、放出音とは異なり、完全には閉鎖されないのが普通である。従って、これらは一般に有声音となる。なお、母音が後続すると放出音と同様に声門が閉じた状態から急激に開くため、声門破裂音を伴って苦しそうな声立てとなる。更にP.Ladefoged(1971)は、入破音と閉鎖音の違いを種類の別よりは寧ろ程度の差と見た方が良くしている。即ち、同書によれば閉鎖音よりも沢山の空気を呑み込んだ上で、更にすばやく調音をすれば入破音に近いものができるという。

上記の文献では、入破音の記述についてはまず次のような共通点が見られる。

- 1) 声門を閉鎖する。
- 2) 調音の際、喉頭下行が認められる。
- 3) 口むろに溜まっている空気を呑み込む。
- 4) 3)で生ずる逆気流で声帯を振動させる。

ただし、Bの服部では、Pikeのいう入破音[bʃ][dʃ][gʃ]と海南島の入破音[ɓ][ɗ]とを著者が意識的に区別している。ただ、補説のところの「空気を逆に肺の方へ吸い込む」とあるが、この「吸い込む」は「呑み込む」の誤りではないかと考えている。なぜなら、「吸い込む」の表現では「吸着音」や「吸気音」を連想させる恐れがあるので、適切な表現ではない。

鄭張1995では、入破音を「有声の先声門閉鎖音」(原文は「先喉塞濁音」である)とし、[ʔb][ʔd]と表記しているところから見れば、Pike説を援用していることがわかる。ただ、声門閉鎖が声帯を振動させる運動より先に行われるため、「先喉塞」とし、Pikeの声門閉鎖の[ʃ]を裏返して[b][d]の前にもってきて表記していることがわかる。

しかし、城生1988では、中に引用されたP.Ladefoged(1971)の説では有声の度合からしか入破音と閉鎖音を見ておらず、入破音と閉鎖音の調音方法の違いが明らかにできなかったので、入破音の記述としては不的確である。

厦門語の入破音は、声門を完全に閉鎖したまま、喉頭下行運動に伴い小舌垂下し、その逆気流で声帯を振動させて調音される弱有声無気の鼻音性入破音である。小舌垂下することによって口腔への通路が閉鎖されると同時に鼻腔への通路が開放されるため、鼻音化しやすいのである。これは厦門語の入破音の特徴であり、厦門語の入破音の鼻音化の決め手でもある。なお、「小舌 xiao²she²」とは「喉ひこ、口蓋垂、懸壅垂」などに相当する中国語の用語であるが、発音器官の調音者articulatorである舌を連想させることができ、そして実際的にも厦門語の入破音の調音において調音者の働きをするので、本稿ではこの用語を用いることにする。

厦門語の入破音の小舌垂下は、口腔内に溜まっている空気を呑み込むことによって生ずる逆気流の助けを借りながら喉頭全体が下行するとともに小舌が垂下するが、喉頭下行の強弱の度合によって小舌垂下の開閉度が決まる。逆気流が強ければ、喉頭下行の力も強い。喉頭下行の力が強ければ、小舌垂下の開閉度も大きいため、鼻音性も強いわけである。

両唇音の[ɓ]の場合は、両唇によって閉鎖を形成するので、口腔内の空気は一番多く溜まっているため、逆気流も[ɓ]は[d], [g]より強く、喉頭下行を助ける力も強くなる。従って小舌垂下の開閉度も大きくなり、[ɓ]の鼻音性も一番強いのである。[ɓ]と比べて、[ɗ]は舌先と歯茎で閉鎖を形成するので、口腔内の空間は[ɓ]の場合ほどなく、空気の量も少ないため、逆気流もやや弱い。[g]の場合は軟口蓋で閉鎖を形成するため、呑み込む空気の量は非常に少ないので、逆気流も一番弱い。従って、厦門語の入破音の鼻音性の強弱の順を ɓ > ɗ > g のように示すことができる。

厦門語の[ɓ]の調音過程は下記のような段階で分析できる。

- ①両唇による閉鎖を形成し声門を閉じたままに、
- ②口腔内の空気を呑み込むように喉頭下行し、外見では喉仏が下がるが、
- ③舌根と垂下した小舌との間に狭めができ、気圧が更に高くなり、

→④これによって生じる逆気流で声帯を振動させる。

厦門語の入破音[6]の語例を下記のように示す。

語例	麦穗	[6esui]	(玉蜀黍)	烏白淨	[ɔ6eiɳɿ]	(いじみあう)
	無柱柱	[6otutu]	(そうとは限らない)	麻文笑	[6a6unɳio]	(微笑む)
	麻雀	[6aɳɿok]	(麻雀)	某舅	[6oku]	(いとこ)

次は、厦門語の入破音[6]と日本語の破裂音[b]を比較してみることにする。まず調音の際の口腔での気流方向を見ると、[6]が内行的ingressiveであるのに対して、[b]が外行的egressiveである。[6]が調音の際、喉頭全体が下がるのに対して、[b]が喉頭全体がもちあげられるというふうに、調音法が全く違う。次は、[b]は外行的であるため、強い破裂を行うと同時に出渡りに微かな息を伴うのに対し、[6]は内行的であるので、口腔内の空気は喉頭の方へ逆流するため、弱い破裂を伴うものの、全く無気である。同じ有声音であっても、有聲の度合も性質もかなり違う。さらに、調音の際、[b]は両唇による閉鎖を形成すると同時に、鼻腔への通路も閉鎖され、鼻音性をもたず、鼻音化しにくい。[6]の場合は[b]とは違って、小舌垂下のため、鼻腔への通路は開放されており、鼻音性が強く、鼻音化しやすいのである。

調音点でも厦門語の[6]と日本語の[b]に違いを見ることができる。外見からは[6]も[b]も両唇による閉鎖であるため、上唇と下唇が調音点であることは一目瞭然であるが、厦門語の[6]にはもう一つ口腔に隠れて見えない調音点が存在する。すなわち、喉頭部に調音の際に喉頭下行と小舌垂下によって形成される狭めである。この狭めは舌根と小舌との間にできるものであり、入破音の調音に大きな役割を果たすが、日本語の[b]にはこのような調音点は存在しない。

従って、厦門語話者が日本語の発音を学習する際、日本語のような有聲の両唇破裂音[b]が厦門語にないため、日本語の「バ、ビ、ブ、ベ、ボ」の子音[b]を厦門語の入破音[6]で代用したり、或いは調音法の同じ無声無気の破裂音[p]で代用したりする間違いがよく観察される。例えば、分類[bunɳui]を[6unɳui]に、貧乏[bimbo:]を[6impo:]に、アルバイト[arubaito]を[arupaito]のように発音したりする。一方、厦門語の[6]は、後続に鼻母音がくる影響で、垂下した小舌がさらに下がって、口腔への通路を閉鎖された呼吸は鼻腔の方へ流れ出て、[6]は鼻音化し[m]になる。これはまた厦門語話者が日本語の発音を学習する際の問題点を見ても分かる。例えば、勉強[benɳkjo:]を[mɛŋɳkjo:]、三分の一[sambunnoiɳi]を[səmmŋnoiɳi]のように発音したりする。そして後続の母音が鼻音化しない場合、逆に[m]が[6]になる場合もある。例えば、質問[ɕitsŋmon]を[ɕitsu6on]、6まん[lokuɳan]を[loku6an]のように発音したりする。

[m] [m]は両唇の鼻音である。IPAの[m]とは似ている音であるが、非鼻音化しやすい点では違う。

[m]については、羅説では「両唇の有声鼻音である」とのみ記述されており、[6]との関係は示されていない。

厦門語の両唇の鼻音[m]は、前述のとおり、入破音の[6]が後続する鼻母音の影響で、調音の際に垂下した小舌が更に垂れ下がり、口腔への通路をほとんど完全に閉鎖して、呼気が全開した鼻腔への通路を通して流れ出る通鼻の鼻音である。ただし、口腔への通路が完全に閉鎖されなかった場合は、一部の呼気が口腔を通して流れ出るため、非常に曖昧な[m]となることもある。厦門語の[m]は、日本語のマ行音の子音と比較してみると、両唇による閉鎖が弱く、鼻腔から流れ出る呼気の量は日本語のより少なく、いわば鼻音化した[6]と言ってもいい音である。

語例	大罵	[dʷamē]	(口喧嘩する)	礼貌	[remāu]	(礼儀)
	拓煤炭	[t'uʷmēt'uaŋ]	(石炭を掘る)	免錢	[mēʔɿ]	(無料)
	名姓	[mĩãɿ]	(姓名)	人民	[tĩnmĩ]	(人民)

[ɸ] [ɸ]は無声有気の両唇摩擦音である。IPAの[ɸ]の調音とはほぼ同じ音である。

[ɸ]については先行研究には記述が見当たらない。

厦門語の両唇摩擦音[ɸ]は、声門摩擦音[h]が円唇の奥舌狭母音の[u]に後続され、唇の円めに伴って狭めができ、調音の際に流れ出る呼気が両唇摩擦を生じてできた音である。これは日本語のフの調音過程とは全く差がないぐらい似ている。

厦門語の[h]は摩擦の弱い声門摩擦音であり、北京語の[x]のような摩擦の強い軟口蓋摩擦音とは違う音である。むしろ日本語の「ハ、ヘ、ホ」の子音[h]とは調音上、聴覚上ともほとんど違いを感じないほど似ている音である。そして、日本語と同じように、前舌の狭母音[i]が後続すると、口蓋化を起こして[h]が[c]になり、奥舌の狭母音[u]が後続すると、唇音化して[h]が[ɸ]になる。更に閩西方言などに見られる奥舌狭母音は厦門語と[u]とは同じ円唇の母音であるので、閩西方言などのフはとりわけ厦門語の[ɸu]に似ているのである。

厦門語の[ɸ]の語例を下記のように挙げておく。

語例	知患	[tiɸui]	(知患)	烟酒	[ɸuenɰu]	(酒とタバコ)
	富饒	[ɸuiaɔ]	(豊か)	会場	[ɸutɕiŋ]	(会場)
	訓練	[ɸunnĩã]	(訓練)	發生	[ɸuaɕiŋ]	(発生)

3. 歯茎音 [t], [t'], [d], [n], [s], [ts], [ts'], [l], [r]

厦門語の歯茎音は、北京語よりもむしろ日本語に似ている。特に弾き音[r]が観察され、その調音は日本語のラ行音の子音とはほとんど差がないところに特徴がある。

調音点を細かく分類すると、[t], [t'], [d], [n]は上の前歯の裏に一番近いところの歯茎で調

音されるので、前部歯茎音とすることができる。特に[t]と[t']は舌先と上の前歯のすぐ裏の前部歯茎とで閉鎖を形成して調音されるため、英語などの中央寄りの歯茎の[t]とは違って、上の前歯が欠けている場合などは厦門語の[t]と[t']の調音は閉鎖がしっかりできないため、はっきりした[t]と[t']の音が得られない。この点は北京語や日本語に関しても同じことが言える。

[s], [ts], [ts']は北京語の[s], [ts], [ts']の調音点よりやや後寄りであり、ほぼ中央の歯茎で調音されるので、歯茎音とするが、[l], [r]は上の前歯から一番遠く離れた、硬口蓋に近いところの歯茎で調音されるので、後部歯茎音とすることができる。

[t] [t]は無声無気の前部歯茎の破裂音である。IPAの[t]よりは調音点はやや前寄りである。

[t]について羅説では、

フランス語のtに比べてすこし軟化している。しかし、北京の「徳」や丹陽の「同」

が[d]になるほどのようには軟化していない。

と記述されているが、これは前述の[p]の軟化を記述したのと同じ分析である。

北京語では、「達到[tā²tāo⁴]」をよく[tā²tāo⁴]のように発音されたりして、無声無気の[t]が[t]→[t̚]→[d]のように発音される傾向が強いことからわかるように、調音の際に口腔内の気圧が低く、有声化しやすいのである。このように調音される[t]の音が有声化するほど軟化になるのであるが、厦門語の[t]は前述の[p]の場合と同じく、フランス語の硬音の[t]ではないが、北京語の[t]→[t̚]→[d]のように有声化することはまずない。むしろ日本語の、秋田[akita]や暖かい[atatakai]、最低[saitēi]、弟[oto:to]などの、語中に見られる「タ、テ、ト」の無声無気の子音[t]とは非常に似ている。

厦門語の[t]の語例を次のように挙げておく。

語例	猪頭	[tit'au]	(猪の頭)	到底	[kautui]	(結局)
	点滴	[tiamti?]	(少し)	甘珍	[kamtī]	(美味しい)
	一帶	[ittai]	(一帯)	一旦	[ittan]	(一旦)
	紅茶	[ante]	(紅茶)	宣傳	[suantuan]	(宣伝)
	態度	[t'aito]	(態度)	電力	[tianhit]	(電力)
	頭頂	[t'autiŋ]	(頭の天辺)	竹刻	[tiokk'ik]	(竹の彫り物)

[t'] [t']は無声有気の前部歯茎破裂音である。IPAの[t]の有気音であるが、調音点はやや前寄りである。

[t']について羅説では、英語のtの音に近いと記述されているが、しかし、厦門語の[t']の調音点は前部歯茎であるのに対して、英語のtは中央寄りの歯茎音である。そして厦門語の[t']は舌

先と前部歯茎とで調音されるが、英語のtは舌端及び前舌面と本稿で言う中央歯茎とで調音される。また、英語のtを調音の際、唇をやや突き出すようにして緊張させるため、同じ有気音であっても、音色がかなり違う(松井千枝1996、『英語音声学-日本語との比較による-〔改訂版〕』朝日出版社p23を参照)。これは英語話者の日本語発音の問題点を見てもわかる。文化庁1982の『音声と音声教育』p189によると、「英語の/t/, /p/, /k/は音節頭などで強い気音をともなって発音される。それを日本語で使うと、非常に外人くさく聞こえる」と記されているが、この言葉の表現の如何は別としても、英語の有気音[t']と日本語の[t']とはかなり違う音であることが伺える。

厦門語の無声有気の前部歯茎破裂音[t']は声門が開放されたまま、舌先と前部歯茎とで閉鎖を形成して調音される音である。北京語では、「每天[mei³t'ian¹]」(毎日)や「食堂[ʂɿ²t'ɑŋ²]」などの[t']は厦門語の[t']とは同じ音である。日本語では、「大豊[t'aiho:]」や「亭主[t'eipiu:]」, 「東海[t'o:kai:]」などの語頭にある「タ, テ, ト」は普通、有気音の[t']である。このような日本語の語頭に見られる有気の[t']は厦門語の[t']とは同じ音であるが、ただ破裂する際に厦門語の[t']のほうはやや強い。したがって、厦門語話者が日本語の「タ, テ, ト」の発音を学習するに際してはほとんど問題にならない。

厦門語の[t']の語例を下記のように挙げる。

語例	對頭	[tuit'au]	(目の敵)	熱天	[duat'ɿ]	(暑い日)
	推拿	[t'uinā]	(按摩治療)	踏茶	[t'ute]	(お茶をする)
	天才	[t'itsai]	(天才)	讀者	[t'apɬia]	(読者)
	推進	[t'uiɬin]	(推進)	通信	[t'ɔŋɕin]	(文通)

[d] [d]は有声無気の前部歯茎の入破音である。IPAの[d]とは似ているが、鼻音性の入破音であるので、後続する鼻母音の影響で鼻音化する点では違う。

[d]については羅説の記述には見当たらない。この音を羅説は[l]と表記し、下記のように記述されている。

舌が柔らかく力が極めて弱く、両側に残される呼気の通路が狭く、北京の[l]のようにははっきりと聞き取れず、[d]に近い音さえ聞こえることがある。従って、厦門人は「老」の音で英語のdの音を振る。そして外国語の中のdで始まる語を真似するとき、往々にしてlで代用する。

現代厦門語の「老」も[ɬau]と発音されるが、羅の1930年代前後は恐らくまだ入破音の記述や表記も正式なものがなかったので、入破音としての記述ができず、そして破裂音の[d]に似ていながら、閉鎖が弱いことから、[l]としか記述のしようがなかったことであろう。

しかし、現代でも、この音についての記述はまだ非常に曖昧である。董説では、厦門方言の「側

面音lには、同部位の有声破裂音が併存していない」と記されながら、「lの開鎖の成分が普通の側面音より多く、時には閉鎖音に似ている。閩南語話者が英語を学習するときにlateとdateをうまく区別できないのはそのためである」としているのに対して、詹説では下記のようにやや異なる記述をなされている。

側面音lは厦門語の中でもすでに閉鎖音dと併合し、l-はd-の異音であると認めてもよいが、一部の若者が共通語の影響を受けて、発音は次第に共通語のl-に近づいている。厦門語のd-をよく観察すると、共通語のl-とはやはり違う。厦門語のd-が発音されるとき、舌先と硬口蓋との接触が多く、舌もわりと緊張していて、呼気は側面音のように両側から流れ出るのではないので、基本的にはやはり閉鎖音的なd-である。

上記のように、董説は/l/を音素としてたてて分析をなされているのに対して、詹説では/d/を音素にたてて分析をなされている。しかしどちらも/l/と/d/について音韻的に分析したのにとどまり、音声の記述は充分になされていない。ただ、上記羅説ではlの調音について、「舌が柔らかく、力が極めて弱い」としているのに対して、詹説は「舌もわりと緊張している」として、やや違った記述をなされている。

一方、中嶋1977では、「l/に該当する音声は有声の舌尖破裂的側面音である。調音に際して、舌尖が緊張していて、かなり破裂音的で[d]に近い音声である。音韻論的には、有声の歯茎破裂音が独立の頭子音音素として存在しないためにおこる音声的現象と解釈されるであろう」と記されている。

いずれにしても、厦門語のこの音は複雑な音声現象を示していることがわかる。この音については前にも触れたように、音声的には、有声の入破音[d]とその異音[n]のほかに、側面音の[l]と弾き音の[r]とその口蓋化音[t]が存在する。なお、閩南方言台湾語にも弾き音[r]が存在するとの報告がある(堀博文1993、『閩南語音韻論』、北大言語学研究報告第3号)。

そこで、もうひとつ未解決の問題の音がある。即ち[dz]の記述である。先行研究をまとめてみると、この[dz]は漳州語には存在し、泉州語にはすでに[l]に吸収されたとされている。台湾語にはいわゆる「不漳不泉」の現象があると同じように、[dz]も混用されている。ところで先行研究のどれも直接厦門語話者からこの[dz]を観察することができなかったにもかかわらず、この音を子音の体系に入れている。本稿では前述のように狭義の厦門語の子音を論ずるが、筆者の観察及び下記に引用する文献に指摘されているように、狭義の厦門語には[dz]が存在しないが、広義の厦門語には[dz]は存在している。

厦門語内部の地域差

『厦門方言詞典』1993, p4より 李 榮監修, 周長楫編纂, (江蘇教育出版社)

厦門語の内部の地域差は旧市街区の距離と正比例となる。旧市街区に近ければ近いほど、

差が小さくなる。旧市街区に離れるほど、差が大きくなる。

古代の「来」,「日」の子音は市街区では併合して[l]と読む。同安では新旧問わず大多数は「来」の子音は[l]と読み,「日」の子音は[dz]と読む。厦門市の遠郊では旧派は同安に同じく,新派は市街区に同じ。

市街区	同安	(訳注:同安は厦門市所属の郊外県で,市内から北に約20キロ)
隣 lin 人 lin	隣 lin 人 dzin	
離 li 兄 li	離 li 兄 dzi	
辣 lua? 熱 lua?	辣 lua? 熱 dzua?	

上記のように,今までの先行研究では不明確であったが,狭義の厦門語と広義の厦門語の概念を明白にした上で厦門語を論ずる必要がある。ちなみに厦門市の出身者がいう厦門語は勿論狭義の厦門語であることは前にも触れておいたとおりである。

ところで,厦門語では上記のとおり[dz]が[l]に吸収された現象は現代厦門語の音声の事実であるからいいが,それについての音声学的な分析が先行研究ではまだどれにも論じられたことは見当たらない。これについては日本語の中で非常によく似た音声現象が観察できる。和歌山方言の例である。

和歌山方言では,年配者にも若者にも日本語のザ行音をダ行と混同して発音されたり,或いはザ行音の発音ができず,ダ行音で代用したりする現象が見られる。このような現象を本稿では「ザダ混同現象」と名付けよう。例えば,

栄螺	サザエ	→	サダエ	[sadzae]	→	[sadae]
雑煮	ゾーニ	→	ドーニ	[dzo:ni]	→	[do:ni]
善哉	ゼンザイ	→	デンガイ	[dzendzai]	→	[dendai]

となっている。一目で分かるように,和歌山方言話者は有声の破裂音[d]ができるが,有声の摩擦音[dz]ができない。即ち,有声の摩擦音[z]が抜けて,摩擦音[dz]が破裂音[d]になったわけである。そしてザ行の語頭に見られる有声の摩擦音[z]の発音は東京語話者にとっても難しいようであることから,和歌山方言話者にとってこの発音は一層難しいことが予測できる。日本語の中には,「あたたかい」[aʔatakai]→「あったかい」[at:akai]のように子音の無声化による促音化や,「荒磯」[araiso]→[aʔiso]のように母音の脱落による約音などの現象が一般的に観察されるが,和歌山方言の子音脱落による「ザダ混同現象」も実に興味深い音声現象である。

厦門語の[dz]が[l]に吸収される現象は,まさに和歌山方言の「ザダ混同現象」に合致していると言える。即ち,現代の厦門語話者が有声の摩擦音[z]ができないようになり,この[z]が脱落した結果,[dz]→[d]→lになったわけである。これは[dz]と[d]と[l]の調音点を見ても同じ歯茎音であり,調音法を見ても同じ有声音であることから,厦門語のこのような「z脱落現象」が充分に

考えられるし、説明もできる。ただし、厦門語のこの[dz]は入破音的な有声の破擦音であったかどうかはまだ先行研究にも記述が見られないし、筆者の調査もまだ不十分なので断言できないが、そうであるとしたら、[dz]→[z]脱落→[d]のように[dz]は[d]になることが説明できるし、そうでなかったら、[dz]→[z]脱落→[d]か[l]かになるとも説明できるが、ただ、先行研究では一様に指摘されてきたように、現代厦門語には有声の破裂音[d]が存在しないので、[z]の脱落により、[dz]は有声の側面音[l]にしかならないとの説明が主流であり、適切であろう。

厦門語の[d]は先行研究のいわゆる[d]にあたる音であるが、実際の音声は有声の歯茎の鼻音性入破音である。これは先述の[ʙ]と後述の[ɣ]とは音韻論的にはb/m, d/n, ɣ/ŋのように厦門語の鼻音性入破音の体系をなしている。/l/は今までの先行研究の成果通りに独立した音素としてたてることができ、音声としては後述の側面音[l]と弾き音[r]と[t]とがある。厦門語の[d]は下記のように記述できる。

厦門語の[d]は調音点はまず前部歯茎がその一つである。この調音点では舌尖と前部歯茎とで閉鎖を形成する。もう一つ隠れた調音点が存在することは前述[6]の場合にも述べてある。即ち調音の際、喉頭下行と小舌垂下によってできた奥舌から舌根あたりと、軟口蓋から小舌までの間とで形成される狭めである。この小舌はまさに調音者であり、小舌が下がるほど、入破音の鼻音性が強くなるのである。そして中国の先行研究では海南島の閩南方言や呉方言及びチワン語、ベトナム語などに観察される入破音を「先喉塞音(先喉頭閉鎖音)」として記述されているのも、この隠れた調音点とその役割に注目したからではないであろうか。

厦門語の[d]の調音過程は下記のような段階で分析できる。

- ①前部歯茎と舌尖による閉鎖を形成し声門を閉じたままに、
- ②口腔内の空気を吞み込むように喉頭下行し、外見では喉仏が下がるが、
- ③舌根と垂下した小舌との間に狭めができ、気圧がやや高くなり、
- ④これによって生じる逆気流で声帯を振動させる。

[d]は両唇の[ʙ]よりも口腔内の空間が狭いため、気圧がさらに低くなり、破裂がさらに弱く、全く無気である。厦門語の入破音を全体的に見れば、鼻音性は前述のとおり小舌垂下にかかわるが、入破音の調音そのものは喉頭下行にかかわるものであり、喉頭下行は強いほど入破音の調音はしやすいわけである。そこで、入破音の調音の「容易度」は後続する母音との関係もある。入破音の喉頭下行は舌位が奥であり、且つ広ければ広いほど行われやすいが、逆に舌位が前であり、且つ狭ければ狭いほど、行われにくいのである。つまり、「忙[ɕaŋ] (忙しい)」のように、後続する母音は奥舌の広母音[a]であれば、入破音の調音がしやすいのであるが、「米[ɕi] (米)」のように、後続する母音は前舌の狭母音であると、入破音の調音はしにくいのである。筆者は入破音の調査で経験したのであるが、前者の場合は聴覚印象でも入破音として捕らえやすいが、後者の場合は

調音しにくい上に、聴覚印象では入破音として捕らえにくいのである。

廈門語の[d]の語例を下記のように示す。

語例	農民	[dɔŋmɪ]	(農民)	一粒	[ɬipɕiap]	(一粒)
	米籬	[ɕidua]	(米籬)	罌人	[ɕueran]	(女性の喧嘩)
	笠仔	[ɕueʔa]	(笠)	老板	[ɕaupan]	(社長)

廈門語の[d]と日本語の[d]を比較してみると、まず調音点での相違が見られる。廈門語の[d]も日本語の[d]も同じく舌尖と前部歯茎とで閉鎖を形成して調音されるが、ただし、日本語の[d]の調音点は口腔内ではここ一カ所のみであるのに対して、廈門語の[d]は更に調音の際、喉頭下行と小舌垂下によって形成される狭めが第2の調音点として存在する。そして、日本語の[d]が調音の際に、舌尖と前部歯茎で閉鎖を形成すると同時に、鼻腔への通路も閉鎖されるが、廈門語の[d]は調音の際に小舌垂下のため、鼻腔への通路は開放されている。

一方、廈門語の入破音[d]と日本語の破裂音[d]の調音法の違いは前述の[ɕ]の場合と同じである。廈門語話者が日本語の「ダ、デ、ド」の発音を学習するとき、無声無気の「タ、テ、ト」で代用する間違いがよく観察されるのは、日本語の「ダ、デ、ド」の子音[d]に似ている廈門語の発音は調音法の違う入破音の[d]ではなく、調音点が同じ、且つ調音法も同じ破裂音である無声無気の[t]が一番似ているからである。例えば、最大[saidai]を[saitai]に、態度[taido]を[taito]に、電車[denɕa]を[tenɕa]に、道路[do:ro]を[to:lo]に、同時[do:ɕi]を[to:ɕi]に、読者[dokuɕa]を[tokuɕa]のように発音されるわけである。

[n] [n]は有聲の前部歯茎の鼻音である。IPAの[n]に似ているが、後続する鼻母音の影響で入破音の[d]が鼻音化して[n]になった点では違う。

[n]については、羅説では有聲の鼻音であるとしか記述されておらず、他の先行研究も音韻論的に[n]の条件及び[l]との相補分布の関係を示したのにとどまり、その音声についての分析はなされていない。

廈門語の[n]は、後続する鼻母音の影響で鼻音化した[d]の音であると言える。これは[d]の調音過程を見ればわかる。[d]の調音では、まず舌尖と前部歯茎で閉鎖を形成し、口腔内の空気を呑み込むようにして喉頭が下行すると同時に、小舌が垂下することによって鼻腔への通路が開放されたままになる。そこへ鼻母音が後続すると、逆気流で声門が振動すると同時に流れ出る呼気がそのまま鼻腔へと流れて出る。この際は口腔への通路は完全に閉鎖されていないと、一部の呼気が口腔へと流れてでることになる。曖昧な[n]の音が観察されるのはこのためである。

したがって、廈門語の鼻音[n]は北京語や日本語の[n]のような純粋な通鼻の鼻音ではなく、僅

かながら一部の呼気が口腔へ流れ出る曖昧な鼻音である。そして前述の[m]と後述の[ŋ]も同じように、気流も普通の鼻音のような外行的気流ではなく、入破音のような特殊な内行的気流である。

厦門語の[n]の語例を下記のように挙げる。

語例	忍耐	[tinnāi]	(忍耐)	頭腦	[t'aunāu]	(頭腦)
	推拿	[t'uinā]	(按摩治療)	努力	[nūhit]	(努力)
	依頼	[idai] → [ināi]	(依頼)	攔着	[danʔa] → [nūāʔa]	(囲う)

厦門語話者が日本語のラ行音とナ行音を学習するとき、発音そのものはたいして問題にはならないが、後続する母音は撥音「ン」の影響で鼻音化された場合や前後に鼻音に挟まれた場合などは、ラ行音をナ行音に発音されたり、逆の場合はナ行音をラ行音に発音されたりする間違いが多く見られる。即ち、後続する母音は鼻音化母音であると[n]になるが、口母音であると[d]になるのである。例えば、前者の場合では、展覧会[tenlanʔkai]を[tennāŋk'ai]に、勤労[k'inlo:]を[k'inno:]に、新郎[ɕiro:]を[ɕinnō:]に、後者の場合、概念[gainen]を[gairen]に、青年[seinen]を[seilen]に、確認[k'akunin]を[k'akuʔin]のように発音されるなどがそうである。

[s] [s]は無声有気の歯茎摩擦音である。IPAの[s]である。

[s]について羅説では、「ほぼ北京語の『希』の子音に近い。厳密に表記すると[ɕ]と表記すべきである」としながら、「この子音は、後続する母音が単純母音[i]であるときと、[a][o][ɔ][e][u][ŋ]などの音の前にあるときは一律に[s]と読む」と記されている。

上記の[s]を「厳密に[ɕ]と表記すべきである」との記述は適切ではない。[ɕ]は[s]の口蓋化音であるにすぎず、音素としては[ɕ]ではなく、[s]をたてるべきである。そして、筆者の観察では、後続する母音が前舌母音[i]でも、中舌母音[ɹ]でも、[s]は一律に口蓋化して[ɕ]になる。

厦門語の歯茎摩擦音[s]は、調音点は厦門語の前部歯茎の[t]よりはやや後寄りであり、上の前歯のすぐ裏から硬口蓋までのほぼ中央ぐらいの歯茎である。調音の際、舌先が中央の歯茎に当てて狭めを形成し、肺からの呼気がこの狭めを通して流れ出る際に摩擦音が起きる音である。厦門語の[s]は北京語の「三歳[san¹ sui⁴] (三歳)」や、「搜索[sou¹ suo³] (搜索)」の[s]とは似ているが、日本語の「差[sɑ]」、「酢[sü]」、「背[se]」、「租[so]」の[s]ともほとんど差が無く、日本語のサ行音を学習するときに全く困難を感じない。厦門語の[s]の語例を次のように挙げる。

語例	真水	[ʔsui]	(きれい)	演説	[iensuat]	(演説)
	家事	[kasu]	(家事)	乾燥	[kansau]	(乾燥)
	技術	[kisut]	(技術)	計算	[kesen]	(計算)
	財産	[tsaisan]	(財産)	住所	[tsusua]	(住所)

前線	[ɲinsuan]	(前線)	多数	[tɔsɔ]	(多数)
登山	[tiŋsuan]	(登山)	不三不四	[putsanpusu]	(ろくでなし)

[ts] [ts]は無声無気の歯茎の破擦音である。IPAの子音表には破擦音が表記されていない。

[ts]について羅説では、北京語の「資」の子音に近いが、英語の[ts]よりはやや前寄りであると記されている。

これに対して、詹説では、ts-, ts'-, s-の舌位は北京語のts-, ts'-, s-より後寄りであり、大体北京語のtsとɲの間に位置すると指摘している。

厦門語の無声無気の歯茎の破擦音[ts]の調音は、まず舌先が前部歯茎に当てて破裂音[t]の閉鎖を形成して口腔内の気圧を高め、肺からの呼気で閉鎖を破ると同時に、舌先がやや後にずれて摩擦音[s]の狭めを形成し、呼気がこの[t]の破裂によってできた[s]の狭めを通して流れ出る際に無気の破擦音が聞こえる。そこで、[ts]の[t]は無気音であるため、有気の摩擦音[s]の摩擦の音もほとんど聞こえない。厦門語の[ts]は前舌の狭母音[i]が後続されると必ず口蓋化を起こして[ts]が[ɲ]なることから、[ts]の調音点は前部歯茎の[t]よりやや後寄りの中央歯茎であることがわかる。一方、北京語の破擦音[ts]も前舌の高母音[i]が後続されると口蓋化して[ts]が[ɲ]になるが、中舌の狭母音[ɹ]の前にたてることから、調音点は詹説に指摘されているように、厦門語の[ts]よりやや前よりの前部歯茎である。例えば、北京語では「自己[tsɿ⁴ ɲi⁸]」(自分)、「子女[tsɿ³ nu³]」(子女)、「滋味[tsɿ¹ uei⁴]」(味)などの[ts]が中舌の狭母音[ɹ]の前にたつが、厦門語では同じ言葉の例を見ると、「自己[tsuki]」、「子女[tsu³du]」、「滋味[tsufi]」のように、[i]よりやや中舌寄りの[ɹ]の前にはたてず、奥舌の狭母音[u]の前にはたっている。そして、北京語の「子弹[tsɿ³ tan⁴]」(弾丸)を、厦門語では「子弹[ɲitan]」を言い、前舌狭母音[i]の影響で舌が持ち上げて[ts]が口蓋化して[ɲ]になる。

一方、日本語の破擦音[ts]は厦門語の[ts]とは非常に似ているが、「勝つ[k'atsɯ]」の[tsɯ]のように中舌寄りの[ɯ]の前にたつことができることから、僅かながら、調音点は厦門語の[ts]よりやや前寄りである。したがって、厦門語話者が日本語のツの発音を学習する際、子音の発音は全く問題にならないが、中舌母音[ɯ]の習得が問題になるのである。

厦門語の[ts]の語例を下記のように示す。

語例	做堆	[tsuetui]	(付き合う)	報水	[potsui]	(密告)
	車站	[ɲatsam]	(駅)	心臟	[ɕimtsɔŋ]	(心臓)
	安全	[antsuan]	(安全)	一斉	[ittsue]	(一斉)
	温泉	[uentsuan]	(温泉)	火災	[hetsai]	(火災)
	強制	[kiŋtse]	(強制)	現在	[ɕiantsai]	(現在)

[tsʰ] [tsʰ]は無声有気の歯茎の破擦音である。[ts]の有気音である。

厦門語の無声有気の歯茎の破擦音[tsʰ]の調音は,[tʰ]が有気音であり,調音の際,声門が開いている点では違うほかは,上記の無気音[t]の調音とほぼ同じである。

[tsʰ]の調音点を見ると,北京語や日本語の[tsʰ]はそれぞれ中舌母音[ɹ]と[ɯ]の前にたつことができるように前寄りであるが,厦門語の[tsʰ]やや後寄りである。前舌の狭母音[i]が後続すると,それぞれ口蓋化して歯茎硬口蓋音の[tɕ]になる点は共通している。

厦門語の[tsʰ]の語例を下記のように示す。

語例	厠池	[tsʰeti]	(トイレ)	布碎	[potsʰui]	(布切れ)
	借冊	[tɕatsʰe]	(本を借りる)	争取	[tɕintsʰu]	(出来る限り)
	吵鬧	[tsʰanāu]	(騒ぐ)	外出	[ŋuātsʰu]	(外出)
	基礎	[kitsʰɔ]	(基礎)	處理	[tsʰuɿi]	(処理)
	催促	[tsʰui tɕɔ]	(催促)			

[l] [l]は有声の後部歯茎の側面音である。IPAの[l]とは似ているが,調音の際,舌先に力を入れず,呼気が全部舌の側面から流れ出るのではなく,一部は舌の上から流れ出ることもある点では違う。

[l]に関する先行研究は前述のとおりである。ただし,詹説に指摘されたように,厦門語の[l]は「若者の間では北京語の影響で,発音は次第に北京語のl-に近づいている」。北京語の[l]は調音点は厦門語の[l]よりやや後寄りであるが,調音の際,舌先に力を入れて閉鎖を形成し,呼気が舌の両側から流れ出て,はっきりした側面音である。例えば,「蘭花[lan²xua¹](蘭)」,「來路[lai²lu⁴](來歴)」,「冷落[lənɣ⁸luo⁴](寂しい)」などのように,IPAの[l]とは全く同じ側面音である。

厦門語の[l]は調音の際,まず舌先と舌の裏面が後部歯茎に軽く当てて舌先に力を入れずに閉鎖を形成する,その閉鎖がゆるく,且つ舌の両側に形成する透き間も狭い。したがって,呼気が舌の両側を通ると同時にたやすく舌先のゆるい閉鎖を破って,舌の上から流れ出る。この場合,舌の上から流れ出る呼気の力で舌先が弾く運動をすれば,弾き音になるわけである。これは日本語のラ行音の子音の調音に非常に似ている。日本語の「ラ,ル,レ,ロ」の子音は調音点も後部歯茎であるが,調音の際,舌先と舌の裏面が後部歯茎に軽く当てて,舌先に力を入れずに後部歯茎とでゆるい閉鎖を形成する。そして,語頭などで呼気の弱い場合の調音は側面音の[l]が観察できるが,呼気の強い場合は弾き音の[r]であり,呼気が非常に強い場合の調音はふるえ音の[ɾ]も観察することができる。日本語の弾き音の度合を $r > \text{r} > l$ のように示すことができる。例えば,歌詞の「ラ,ラ,ラ」などは側面音の[l]であり,「ラムネ」や「ルビー」,「れきし」,「ろれつ」などの語頭

の「ラ, ル, レ, ロ」の子音も普通, 側面音の[l]である。怒るときの「こら! [kora]」の「ら」の子音[r]は程度にもよるが, 2回以上舌先が弾く運動が観察されるので, ロシア語などのふるえ音[r]に非常に似ている。その他の場合のラ行音の子音は普通, 弾き音の[r]が多い。

一方, 厦門語の[l]と[d]は, 調音点は非常に似ているが, 調音法は全く違う。呼気は[d]は内行的であるのに対して, [l]は外行的である。喉頭運動は[d]は下行的であるのに対して, [l]は上昇的である。そして[l]は有気の有声音であるが, [d]は全く無気の弱有声音である。

厦門語の[l]の語例を挙げると次のようになる。

語例	将来	[kɔŋlai]	(将来)	拍雷	[p'alui]	(雷が鳴る)
	男的	[lamŋɛ]	(男)	心理	[ɕimli]	(心理)
	森林	[ɕinlin]	(森林)	展览会	[tianlamɕui]	(展览会)

[ɾ] [ɾ]は有聲の後部歯茎の弾き音である。IPAの[ɾ]である。

[ɾ]については堀博文1993では,

後続の母音が[i][u][ɔ][ɤ]の場合には, 舌尖の弾き音([ɾ], ここでは[r]で表す)

に聞こえることがあり, ……他の母音の前では, 側面音のようである。つまり,

[r] …… [i][u][ɔ][ɤ]の前.

[l] …… [e][a]の前.

この弾き音の[r]と側面音の[l]は, 同一の音素/l/に該当するものと解釈する。

と指摘されている。これは台湾語についての記述であるが, 弾き音の記述は非常に参考になる。閩南方言内部には多かれ少なかれ相違点が見られるが, 入破音と弾き音の存在することは最大の共通点である。

厦門語の弾き音[r]は上記の[l]の調音過程と全く同じであるが, 呼気が舌の上から流れ出る際に, 舌先に力が入っていないため, 流れ出る呼気の勢いで舌先が弾いて生ずる音である。ただし, 呼気の勢いが強くても, 日本語の[r]のようなふるえ音が観察されない。北京語には厦門語の[r]のような発音がないが, 日本語の「ラ, ル, レ, ロ」の子音[r]とはほとんど差がないほど似ている発音である。

厦門語の[r]の語例を下記に挙げる。

語例	漏嘴	[rautsui]	(口が漏れる)	打獵	[p'araʔ]	(狩猟)
	聾人	[rueran]	(女性が喧嘩をする)	屢叫	[ranɕiao]	(男根)
	力氣	[ratk'i]	(力)	在室女	[tsaiɕieʔru]	(生娘)
	種類	[ɕɿrui]	(種類)	旅行	[ruɕim]	(旅行)
	理論	[ɿirun]	(理論)	依頼	[irai]	(頼る)

4. 歯茎硬口蓋音 [tɕ, tɕʰ, ɕ, ŋ, ɮ]

厦門語の歯茎硬口蓋音[tɕ, tɕʰ, ɕ, ŋ, ɮ]はすべて口蓋化された音である。[tɕ, tɕʰ, ɕ]はそれぞれ歯茎の破擦音[ts]と[tsʰ]及び摩擦音[s]の口蓋化した音であり、[ŋ]は[n]の口蓋化した音である。[ɮ]は[l]の口蓋化した音である。日本語にも全く同じ口蓋化音が存在する。

[tɕ] [tɕʰ]は無声無気の歯茎硬口蓋の破擦音である。歯茎破擦音[ts]の口蓋化した音である。

破擦音[ts]と[tsʰ]の口蓋化した歯茎硬口蓋音[tɕ]と[tɕʰ]の記述は、羅説の重要な研究成果であることは前述のとおりである。これは中国語各方言の研究にも大きな影響を及ぼした記述でもある。ここでは羅説のこの研究成果を援用させてもらいながら、[tɕ]と[tɕʰ]の調音過程を下記のように分析してみることにする。

厦門語の無声無気の歯茎硬口蓋破擦音[tɕ]は、歯茎破擦音[ts]の[t]と[s]がそれぞれ後続する前舌の狭母音[i]の影響で前舌面がやや持ち上って、調音点は破裂音の[t]の前部歯茎よりやや後寄りの歯茎から硬口蓋の前部近くまでである。調音の際、舌先だけではなく、舌端も一緒に歯茎と硬口蓋の前部あたりに当てて調音されるため、歯茎硬口蓋音の[tɕ]であるが、[ɕ]も調音点は摩擦音の[s]の前部歯茎よりも後寄りの歯茎硬口蓋である。[tɕ]の調音は破裂音の[t]も摩擦音の[s]も口蓋化する音であり、今までの記述ではこのような[tɕ]を[tɕʰ]と表記していたが、上記の理由で[tɕ]と表記すべきである。

北京語の無声無気の歯茎硬口蓋破擦音[tɕ]は厦門語の[tɕ]とは非常に似ている。例えば、「借酒[tɕie⁴ tɕiu³]（酒を借りる）」、「集中[tɕi² tɕɕŋ¹]（集中）」の[tɕ]がそうである。ただし、北京語の[tɕ]の調音点は聴覚印象では厦門語の[tɕ]よりはやや前寄りであるが、これは後続する前舌の狭母音[i]の舌位が厦門語の[i]よりやや前寄りであるためである。

日本語の語中の、無気音のように発音される「ち、ちゃ、ちゅ、ちょ」の子音[tɕ]も聴覚印象では厦門語の[tɕ]とは非常に似ている。例えば、「番地[ban tɕi]」、「紅茶[ko: tɕa]」、「焼酎[ɕo: tɕu:]」、「おっちょこちよい[oɕ: ɕoko tɕoi]」などの語中の[tɕ]がそうであるが、後続する前舌の狭母音[i]の舌位は厦門語の[i]よりもやや後寄りであるため、同じ歯茎硬口蓋音であるが、調音点では北京語の[tɕ]は一番前寄り、日本語の[tɕ]は一番後寄り、厦門語の[tɕ]は北京語の[tɕ]と日本語の[tɕ]の中間ぐらいに位置する。

厦門語の[tɕ]の語例を下記に示す。

語例	肥漬漬 [ɕei tɕiʔ tɕiʔ] (肥えている)	猪舌 [ti tɕiʔ] (豚タン)
鬼精 [kui tɕi]	(お喋り)	天井 [tʰi tɕi] (中庭)
放晴 [ho tɕi]	(晴れる)	烏白淨 [oɕei tɕi] (唾み合う)
将来 [tɕɕŋlai]	(将来)	漸漸 [tɕam tɕam] (漸く)

[ɲ] [ɲ̥]は無声有気の歯茎硬口蓋の破擦音である。歯茎破擦音[tsʰ]の口蓋化した音である。

[ɲ̥]については羅説では、北京語の「欺」の子音に近いと記述して、更に[ts][tsʰ][ɲ̥][ɲ̥]について先行研究を批判し、下記のように指摘している。

この4つの音は決して混同しない。そして[a][ɔ][o][e][u][ɯ]などの音の前では一律に[ts][tsʰ]と読み、iの音の前にのみ口蓋化(palatalize)の影響で[ɲ̥][ɲ̥]に変わるだけであって、英語の舌尖と前舌面混合のch[tʃ]とchh[tʃʰ]を以てこの4つの音を概括すると、実際の言語とは掛け離れ過ぎたのではないか。

筆者は羅説のこの指摘に大いに賛成である。そして、日本語の「シ」と「チ」の表記についても羅説に指摘されたような記述の問題がある。日本語のシとチの表記については今まで実際の音声とは掛け離れていながら[f]と[tʃ]で表記してきた先行研究が多く、このような表記を日本語教育にもってくると、中国語話者が正しい日本語の発音を学習するときの障害にもなりかねない。筆者の母語である永州方言には[f]と[tʃ]が存在し、英語を学習するときには母語利用できるが、日本語を学習するときにはかえって母語干渉となるのがその証拠である。

厦門語の[ɲ̥]の調音過程は[ɲ̥]とは同じであるが、声門が全開したまま調音し、出渡りにやや強い帯気の有気音である。厦門語の[ɲ̥]は日本語の語頭に現れる有気の「チ、チャ、チュ、チョ」の子音とは同じ音である。例えば、「父[ɲ̥iɲ̥i]」、「チャーハン[ɲ̥a:han]」、「中部[ɲ̥u:bu]」、「ちょっと[ɲ̥ot:o]」などの[ɲ̥]がそうである。したがって、厦門語話者が日本語のこれらの発音を学習するときに全く困難を感じない。

厦門語の[ɲ̥]の語例を次のように挙げる。

語例	魚刺	[ɲ̥iɲ̥i]	(魚の骨)	飼鷄	[ɲ̥ikue]	(養鷄)
	秋天	[ɲ̥iutʰi]	(秋)	魚鮮	[ɲ̥iɲ̥i]	(鮮魚)
	支持	[ɲ̥iɲ̥i]	(支持)	憂愁	[iuɲ̥iu]	(憂愁)
	冲水	[ɲ̥ɔntsui]	(水を浴びる)	簽證	[ɲ̥ianɲ̥in]	(ビザ)

[ɲ̥] [ɲ̥]は無声有気の歯茎硬口蓋の摩擦音である。IPAの[その他の記号]に挙げている[ɲ̥]の音とは同じ音である。

[ɲ̥]については羅説では、[s]の記述にこの音について触れてはいるものの、子音表には挙げていない。他の先行研究もこの音については特に記述されていない。しかし、[ɲ̥]は[ɲ̥][ɲ̥]と同じように、それぞれ[s][ts][tsʰ]の口蓋化音であり、[s][ts][tsʰ]と体系をなしている。このような口蓋化音の体系は北京語にも日本語にも存在する。

[ɲ̥]については董説では下記のような指摘がある。

実はsにも狭い前舌母音が後続すると口蓋化する現象があるが、今までsから分けた

人はいない。……羅氏は[s]がわたり音の[i]の前でのみ口蓋化し、しかし、口蓋化の程度は[ɕ]と[ɕʰ]のように顕著ではないと考えるので、独立の[ɕ]をたてなかったわけである。

上記の董説は音韻論で厦門語の分析をなされたものであり、結局、厦門語の/s/の異音としても[ɕ]を取り上げなかった。無論、音韻論的に考える場合、[ɕ]は/s/の異音であり、音素としてはたてる必要がないが、しかし、どんな音韻論でも、音声学的な分析を論拠にしなければ、不備を無くすこともできないであろう。

厦門語の[ɕ]は、[s]が後続する前舌の狭母音[i]の影響で前舌面がやや持ち上げて、調音点は中央歯茎から後部歯茎と硬口蓋の前部あたりまでずれて、前舌面とで狭めを形成する。呼気がこの狭めを通して流れ出る際に、口蓋化した[ɕ]の音が聞こえる。現代北京語では、前舌の狭母音[i]に後続されると一般的に口蓋化して[ɕ]となるが、一部では口蓋化せずに、英語などに普通見られる[si:]のような音も観察される。例えば、「喜歡xi³huan¹」は普通[ɕi³xuan¹]と発音するが、一部では[si³xuan¹]と発音されるのも観察できる。むしろ日本語の「シ、シャ、シュ、ショ」の子音が語頭語中問わず、厦門語の[ɕ]に似ている。例えば、「猪[inoɕiɕi]」、「鯨[ɕaɕihoko]」、「趣味[ɕumi]」、「商学[ɕo:ɲakw]」などがそうである。これらの日本語の発音は厦門語話者にとっては困難ではない。

厦門語の[ɕ]の語例を下記に示す。

語例	身体	[ɕint'e]	(体)	心臓	[ɕimtsɔŋ]	(心臓)
	詩詞	[ɕisu]	(詩)	去死	[k'ieɕi]	(死ね)
	忤是	[ɲɕei]	(違う)	后生	[hauɕɪ]	(若い衆)
	電風扇	[tianhɔŋɕɪ]	(扇風機)	補償	[pɔɕioŋ]	(補償)

[ɲ] [ɲ]は歯茎硬口蓋の鼻音である。IPAにはこの音がないが、[ɲ]の口蓋化した音である。

[ɲ]の口蓋化した[ɲ]の音は先行研究での記述は見当たらない。

厦門語の歯茎硬口蓋の鼻音[ɲ]は、歯茎入破音の[d]が前舌の狭い鼻母音[i]に後続される場合に、[d]が鼻音化し、さらに口蓋化して[ɲ]になる。この[ɲ]の鼻音は聴覚印象では北京語の「你好[ni³xau³](こんにちは)」の[n]と日本語の「日本[nihoN]」の[n]とは非常に似ており、厦門語の鼻音の中で一番純粹の通鼻鼻音に近い鼻音である。なぜなら、前述のように、前舌の狭母音に後続されると、入破音の調音がしにくく、内行的な呼気も非常に弱いからである。そして、[ɲ]に鼻母音[i]しか後続せず、この[i]の舌位が[i]よりも前であり、厦門語の中では、一番狭い前舌母音である。ただし、厦門語の鼻子音の後に必ず鼻母音が後続する点は北京語にも日本語にもないところである。逆に言うと、厦門語話者が日本語のナ行音を学習する際、鼻音そのものの発音よりは、

鼻音に後続する母音を鼻音化させるのが問題であることを予測できるわけである。

なお、本稿では、口蓋化鼻音[n̠]と硬口蓋鼻音[ɲ]をそれぞれ次のような条件で使い分ける。口蓋化鼻音[n̠]の場合は後続する鼻母音が[i]しかなく、硬口蓋鼻音[ɲ]の場合は後続する鼻母音は[i]とその他の鼻母音による重母音であるのが条件である。例えば、後述のように、[iã], [iãu], [iũ]の前に現れるのが硬口蓋鼻音の[ɲ]である。日本語についても同じ考えである。「ニ[n̠i]」は口蓋化鼻音であり、「ニャ, ニュ, ニョ[ɲa][ɲu], [ɲo]」は硬口蓋鼻音である。なぜなら、調音点を観察すると、後続する母音が前舌の狭母音であると、調音点が後部歯茎あたりであるのに対し、後続する母音が奥舌であるか、広母音であると、舌根が下がるのにつれて、調音点も後部歯茎より後にずれて、硬口蓋になるからである。

厦門語の[n̠]の語例を下記に挙げる。

語例	捏死	[n̠iɕi]	(絞め殺す)	尼姑	[n̠iko]	(尼さん)
	泥土	[n̠it'ɔ]	(土)	田蛉	[ts'an̠i]	(蜻蛉)
	對年	[tuin̠i]	(周年)	漢字	[hagn̠i]	(漢字)
	豆奶	[taun̠i]	(豆乳)	染布	[n̠ipɔ]	(布を染める)

[ɬ] [ɬ]は有声の後部歯茎の弾き音である。IPAには子音表にこの音がないが、弾き音[ɾ]の口蓋化した音である。

[ɬ]については先行研究の記述は見当たらない。

厦門語の歯茎音[ɬ]は調音点は後部歯茎であり、[ɾ]とは同じであるが、調音される際に、後続する前舌狭母音[i]の影響で、舌尖と前の舌面が硬口蓋の方へ持ち上がり、やや口蓋化した音になる。北京語には[ɾ]や[ɬ]のような弾き音は存在しないが、日本語の「リ, リャ, リュ, リョ」の子音は後続する前舌の狭母音[i]の影響で普通、口蓋化する。日本語の口蓋化音は五十音図のイ段音によく観察されるのがそのためである。そして、弾き音で発音される日本語の「リ, リャ, リュ, リョ」の子音では厦門語の[ɬ]と区別がつかないほど非常に似ている。なお、本稿では、口蓋化した弾き音を[l]と[ɾ]を合わせた[ɬ]を用いる。なお、日本音声学学会1976の『音声学大辞典』(三修社) p373にも「ラ」行子音として[ɬ]を挙げているが、本稿との概念がやや違う。

厦門語の[ɬ]の語例を下記に示す。

語例	柔軟	[ɬiuruan]	(柔軟)	忍耐	[ɬimn̠i]	(忍耐)
	任命	[ɬimɕin]	(任命)	自然	[tsuɬian]	(自然)
	鯉魚	[ɬiɕi]	(鯉)	概念	[kaiɬiam]	(概念)
	改良	[kaiɬium]	(改良)	確立	[k'akɬit]	(確立)
	能力	[ɬinɬit]	(能力)	日本	[ɬitpen]	(日本)

5. 硬口蓋音 [ɕ, ɲ]

厦門語の硬口蓋音[ɕ]と[ɲ]は、それぞれ[h]と[n]の口蓋化した音であるとも言えるが、しかし、前述の[ɕ]と[ɲ]を比べると調音点は更に後寄りの硬口蓋であり、そして[ɕ][ɲ]のように、前舌面が硬口蓋の方へもちあがるのではなく、舌全体が硬口蓋へもちあげて調音されるため、服部1984によると、「それ自身の調音が口蓋化と同一であるから、これらの子音が口蓋化されるということは、普通いわない」(服部1984『音声学』p110を参照)。

[ɕ] [ɕ]は無声有気の硬口蓋摩擦音である。IPAの[ɕ]とは非常に似ている音である。

[ɕ]の記述については羅説では見当たらない。詹説には次のような記述が見られる。

h-は純粹の無声の声門摩擦音である。調音される際、筋肉の緊張部位は喉頭部にあり、狭母音i, uの前にくるときだけ、狭母音の影響で舌根が上昇してはじめて、x-に近い音が調音される。

しかし、実際の音は詹説が指摘するような軟口蓋摩擦音の[x]ではなく、調音点が前の硬口蓋摩擦音の[ɕ]である。ただ、このような硬口蓋摩擦音の[ɕ]が北京語には存在しないため、北京語話者が日本語のヒの発音を学習するときに、軟口蓋音の[xi]のように発音したりする間違いがよく観察される。それに、中国語の北京語以外の北方方言にも厦門語の硬口蓋摩擦音[ɕ]のような子音が観察されないことは、ほとんどの方言の/h/は軟口蓋摩擦音の[x]であり、厦門語のような声門摩擦音[h]ではないからである。この[ɕ]は厦門語の音声の特徴の一つであると言える。そして、日本語のヒの発音は厦門語話者にとっては全く困難ではないことから見ても、厦門語の前舌の狭母音[i]に後続される[h]の音声は、詹説の軟口蓋音の[x]ではなく、硬口蓋音の[ɕ]であることがわかる。ただ、東京の一部でも「ヒ」の発音ができなく、「シ」で代用することがよく聞かれるが、筆者の観察では、「ヒ」を代用する「シ」は普通の[s]の口蓋化した[ɕ]ではなく、やや円唇であり、調音の際、前舌面が硬口蓋へ向かってもちあがるのではなく、前舌面の両縁がもちあがり、そして「前歯の後に小さい空洞ができるので[ʃ]的な音色を有する」(服部1984、『音声学』p88を参照)。例えば、「西[niɕi]」の「シ」は平唇の[ɕ]であるが、「あのしと[ano ʃ ʔto]」の「シ」は平唇の[ɕ]ではなく、非平唇の[ʃ]である。

上述のように、厦門語の[ɕ]は、声門音[h]が前舌の狭母音[i]に後続され、舌全体が硬口蓋のほうへ持ち上がり、前舌面と硬口蓋との間に狭めができ、呼気が流れ出る際に生ずる硬口蓋の摩擦音である。厦門語の[ɕ]の調音過程は日本語のヒ[çi]の調音過程とは全く同じである。そして、[h]が円唇の奥舌母音[u]の前にくると、唇音化して[ɸ]になるが、この唇音化した両唇摩擦音[ɸ]ももちろん北京語には存在しない。これは、北京語及び中国語北方方言には唇歯音の[f]が存在し、[h]が存在しないことと、厦門語や閩南方言には[f]が存在せず、[h]が存在することとの関連

性があることは考えられる。そして、中国語の南方方言の中でも、吳方言(蘇州語)や粵方言(広東語)以外の方言での、[f][h]混同現象を併せて考えると、日本語のハ行音の歴史的な変化との接点があるように考えられるが、これについては他の機会で論じたい。

厦門語の[ç]の語例を下記のように示す。

語例	魚翅	[çiçip]	(魚のヒレ)	狗兄狗弟	[kauçiankauti]	(不良仲間)
	振興	[çiŋçin]	(振興)	形式	[çiŋçik]	(形式)
	現在	[çiantσαι]	(現在)	献身	[çiançin]	(献身)
	習慣	[çitkuan]	(習慣)	樹葉	[çiũçia]	(木の葉)

[ɲ] [ɲ]は有聲の硬口蓋の鼻音である。IPAの[ɲ]とは似ているが、厦門語の[ɲ]は入破音[d]の鼻音化音である点ではIPAの[ɲ]とは違う。

[ɲ]については先行研究の記述には見当たらない。

厦門語の[ɲ]は[n]と比べると、調音点はやはり後寄りの硬口蓋である。もちろん後続する鼻母音が[n]の場合の[i]ではなく、下記の語例に挙げているように、[iã], [iãũ], [iũ]である。すなわち、鼻母音[i]の後に更に奥舌の[ũ]か広母音の[ã]がきて、[iã], [iãũ], [iũ]のように重母音となると、舌が奥舌と広母音の影響で[i]の後部歯茎より更に後の硬口蓋へもちあがって調音するため、基本的には[n]の口蓋化音であるが、調音点は[n]よりも後寄りの硬口蓋であるので、本稿では硬口蓋音と認める。これは前述の硬口蓋音の[ç]とは異なるところである。厦門語の歯茎硬口蓋鼻音[n]と硬口蓋鼻音[ɲ]の調音過程は日本語の「ニ」と「ニャ、ニュ、ニョ」の調音過程と非常に似ている。日本語の「ニ」の子音は後続する前舌の狭母音[i]の影響で口蓋化して[n]になるが、調音点は後部歯茎であり、硬口蓋ではない。しかし、「ニャ、ニュ、ニョ」の場合は後続する母音がそれぞれ[ja][ju][jo]であるため、その影響で前舌面が更に硬口蓋へもちあがって調音するため、調音点は硬口蓋である。基本的にはやはり口蓋化音であるが、調音点が硬口蓋であるので、硬口蓋鼻音の[ɲ]と表記してもなんの差し支えもない。しかし、「ニ」の子音を硬口蓋鼻音[ɲ]と表記するのは的確ではない。なお、日本語の「ニャ、ニュ、ニョ」の表記については、後続する半母音[j]はわたり音であり、経済性のためそれぞれ[pa][pu][po]と表記できるが、厦門語の[i]は発音時間が長く、且つ一定しており、日本語の[j]のようなわたり音や半母音ではないので、下記語例のように表記するのが適切である。厦門語の[ɲ]の語例を下記のように示す。

語例	姑娘	[kɔɲiũ]	(修道女)	二兩	[nẽɲiũ]	(100g)
	讓歩	[ɲiãpau]	(讓歩)	領巾	[ɲiãkun]	(ネッカチーフ)
	真猫	[çiɲiãũ]	(けち)	爪子	[ɲiãũɲa]	(爪)
	訓練	[çunɲiã]	(訓練)	原料	[ɲũãɲiãũ]	(原料)

6. 軟口蓋音 [k, k', ɣ, ŋ]

厦門語の軟口蓋音は普通、軟口蓋と奥舌面で閉鎖を形成して調音されるが、[ɣ]と[ŋ]の場合は軟口蓋だけでなく、小舌が垂下して第2の調音点とも言うべき狭めを形成して調音されるところに特徴がある。

[k] [k]は無声無気の軟口蓋の破裂音である。IPAの[k]の無気音である。

[k]について羅説では、フランス語のcの硬音よりはやや軟化するが、北京語の「格」や丹陽の話言葉の「求」の子音ほど軟化していないと記述されている。

[k]の調音点は奥舌面と軟口蓋であり、口腔の奥であるため、後続する母音の影響で[k]の調音点もずれる。前舌の狭母音[i]が後続すると口蓋化は起きるが、[ts]→[tɕ], [s]→[ɕ]のように違う音声になることはまずないので、本稿では一律に[k]と表記する。前述の[p]と[t]のように、厦門語の[k]は北京語のような有声化が起きない。例えば、北京語の「山谷」[ʂan¹kʊ³]（山谷）、「小狗」[ɕiao³kəu³]（子犬）、「打嗝兒」[tʰa³kɛr³]（げっぷが出る）などに見られる有声化の[k]がそうである。しかし、厦門語の[k]は有声化はしないが、[k]に対応する有声の破裂音[ɣ]が存在しないため、厦門語話者が日本語を学習するとき、日本語のガ行音をこの無声無気の[k]で代用する間違いが多く観察される。例えば、運河[un̩ga]を[un̩ka]、学生[gakusei]を[kakusei]のように発音したりする。

厦門語の[k]の語例を下記に示す。

語例	看見	[k'uan̩kian]	(見える)	各自	[kaki]	(各自)
	理解	[tɕikai]	(理解)	日光	[tɕitkən̩]	(日光)
	痛感	[t'ən̩kan]	(痛感)	作家	[tsəkka]	(作家)
	四季	[ɕikui]	(四季)	古代	[kətai]	(古代)
	禁止	[kim̩tɕi]	(禁止)	計算	[kesen]	(計算)

[k'] [k']は無声有気の軟口蓋の破裂音である。IPAの[k]の有気音である。

[k']については羅説では、英語のkの音に似ており、中国語のほとんどの方言の[k']の読み方と同じであると記述されている。

厦門語の[k']はまず奥舌面と軟口蓋とで閉鎖を形成して調音されるが、後続する母音によって調音点の位置が前後にずれたり、音色も少し変わったりする。前舌の狭母音[i]がくると、調音点は後部硬口蓋近くであり、やや口蓋化した音色になる。広母音[a]がくると調音点は硬口蓋と軟口蓋との境に位置するが、一番奥舌の[u]がくると、調音点は一番奥の軟口蓋である。前述のように、[k']の口蓋化音と言っても調音点はかなり奥であるため、口蓋化の程度は弱いので、本稿

では特別に扱わないことにする。一方、厦門語の[k']は日本語の語頭に見られる力行音の有気音とは非常に似ているため、厦門語話者にとっては力行音の学習は問題にはならない。しかし、北京語には口蓋化の「キ」[k'i]に似ている音が存在しないため、「キ」の学習は北京語話者には難しいことを予測できる。

厦門語の[k']の語例を下記のように示す。

語例	來客	[laik'e]	(來客)	苦勞	[k'ɔɬau]	(苦勞する)
	困難	[k'unnā]	(困難)	確立	[k'akɬit]	(確立)
	開始	[k'aiɕi]	(開始)	力氣	[ɾatɕ'i]	(力)
	來去	[laik'i]	(さようなら)	齒科	[k'ik'e]	(齒科)
	較愛	[k'aai]	(わりと好き)	航空	[hɔŋk'ɔŋ]	(航空)

[g] [g]は有声無気の軟口蓋の入破音である。IPAの[g]とは似ている音であるが、鼻音性が強い点では違うところである。

[g]についての記述は先行研究には見当たらないが、羅説ではこの音を有声無気の破裂音[g]と見て、「舌根と軟口蓋との接触は軽く、破裂の力が弱く、英語のgよりも軟化している。うっかりすると往々にして[n]と混同して聞こえることがある」と指摘されている。その他の先行研究は羅説を越えた成果は見当たらない。

厦門語の[g]は前述の[b], [d]と一緒に[b][d][g]のように入破音の体系をなしている。そして対応する鼻音はそれぞれ[m][n][ŋ]であり、[b/m], [d/n], [g/ŋ]のように表記することができる。

厦門語の[g]は調音の際、まず舌根と軟口蓋との閉鎖を(第1調音点)形成し、声門を閉じたままにして、咽頭腔内にある僅かな空気を呑み込むように喉頭全体が下がり、さらに小舌垂下して舌根との間に狭め(第2調音点)ができて、気圧がやや高くなり、これによって生ずる逆気流により声帯が振動する。ここでは、小舌垂下により、鼻腔への通路が開放されたままになるため、鼻音化しやすい点は前述の[b][d]の場合と同じである。

厦門語の[g]の調音過程は下記のような段階で分析できる。

- ①舌根と軟口蓋による閉鎖を形成し声門を閉じたままに、
- ②咽頭腔内の空気を呑み込むように喉頭下行し、外見では喉仏が下がるが、
- ③小舌が垂下して舌根と狭めができ、気圧がやや高くなり、
- ④これによって生ずる逆気流で声帯を振動させる。

[g]の調音は[b][d]よりも難しく、海南島海口・文昌方言のように、[g]は無声無気の軟口蓋音[k]に代用される傾向が見られる(朱新建1995を参照)。

厦門語の[g]の語例を下記に示す。

語例	月亮	[gəʔm̩]	(月)	牛公	[gukəŋ]	(雄牛)
	門牙	[m̩g̊e]	(前歯)	十五	[tsap̚g̊o]	(十五)
	我	[g̊ua]	(わたし)	阮	[g̊un]	(私たち)
	工藝品	[kaŋg̊ep̚'in]	(工芸品)	行業	[haŋg̊iap]	(業界)
	方言	[hoŋg̊ian]	(方言)	較勢食	[k'aʔg̊auʔɕiaʔ]	(食通)
	銀行	[g̊unhaŋ]	(銀行)	外国人	[g̊uakoklaŋ]	(外国人)

[ŋ] [ŋ]は有声の軟口蓋の鼻音である。IPAの[ŋ]とは似ているが、厦門語の[ŋ]は純粋な通鼻鼻音ではなく、入破音の[g̊]が鼻音化して[ŋ]になった点は違うところである。

[ŋ]については羅説では、廣州の「我」、「牛」、「危」などの子音の発音とは同じであるとされている。一方、詹説では、b-, d-, g-が鼻音化母音の前に現れるとき、鼻音の成分を加えるとm-, n-, ŋ-になると記述している。

厦門語の[ŋ]は前述の[m]と[n]の場合と同じように、先行研究では[ŋ]と[g̊]との関係は示されているものの、音声学的にその調音の過程を明記されていない。厦門語の[ŋ]の鼻音性の決め手は小舌垂下であることも前述のとおりである。[ŋ]の調音過程は声帯振動までは[g̊]とは全く同じである。奥舌面と軟口蓋とで閉鎖を形成して、咽頭腔内の空気を呑み込むように喉頭下行するとともに、小舌垂下して、鼻腔への通路を開放されたままになる。喉頭下行の力と小舌垂下で高められた気圧とで生ずる逆気流が声帯を振動させ、呼吸は後続する鼻母音の影響で小舌がさらに垂下し、全閉に近い鼻腔への通路を通して流れて出る。ただし、垂下した小舌は口腔への通路を完全に閉鎖していない場合、[ŋ]は曖昧な鼻音になるわけである。一方、この[ŋ]が存在することにより、厦門語話者が日本語のガ行鼻濁音の[ŋa, ŋi, ŋu, ŋe, ŋo]を学習するときにほとんど困難を感じない。

厦門語の[ŋ]の語例を下記に示す。

語例	原料	[ŋo̯aŋa̯o]	(原料)	兩個	[n̩g̊e]	(二人)
	替換	[t'uiŋo̯a]	(交替する)	前後	[ɕianŋa̯o]	(前後)
	午后	[ŋo̯sau]	(午後)	五方	[ŋo̯həŋ]	(東西南北中)
	硬幣	[ŋi̯pe]	(コイン)	雅座	[ŋa̯tso]	(お座敷)
	挾菜	[ŋo̯eʔts'aɪ]	(お菜を取る)	豆莢	[taun̩o̯eʔ]	(莢豆)

7. 声門音 [h]

厦門語の[h]は純粋な声門音であるのに対して、北京語の/h/は軟口蓋摩擦音の[x]である。したがって、厦門語の[h]はむしろ日本語の[h]と同じ音である。前述の厦門語の[h]の唇音化の[ɸ]

も硬口蓋音の[c]も日本語に同じ音が存在するので、厦門語話者が日本語のハ行音を学習する際に北京語話者とは違って、何ら困難を感じない。

[h]について羅説では、声門の無声の摩擦音であり、廣州の「海」などの子音に近いと記されている。詹説でも、h-は純粋の無声の声門摩擦音であると記述されている。

上記の先行研究の記述どおり、厦門語の[h]はIPAの両声帯で調音される無声の声門摩擦音[h]とは同じ音である。

厦門語の[h]の語例を下記に示す。

語例	海濱浴場	[haipiniktʰu]	(海水浴場)	航空	[hɑŋk'ɔŋ]	(航空)
	好看	[hok'ɑu]	(きれい)	合同	[haotɑŋ]	(契約)
	護士	[hɔsu]	(看護婦, 看護師)	花草	[huets'au]	(花草)
	火柴	[hets'a]	(マッチ)	機會	[kihue]	(機會)

8. 音節末子音 [m], [n], [ŋ], [p], [t], [k], [ʔ]

厦門語の音節末子音は、語頭にたつ頭子音とは違うところは、頭子音はすべてはっきり聞こえる外破音explosiveであり、音節末子音はすべてほとんど聞こえない内破音implosiveである。

ここでは、implosiveについては、内破音と入破音の二つの訳語があるが、内破音のimplosiveは外破音のexplosiveに対して用いる。入破音implosiveはPikel1943, p.91やChomsky-Halle1968, p.315などの用語である。入破音はまたsuction stopとも言う。この入破音に対するのは放出音ejectiveである。

厦門語の音節末子音について羅説では下記のように記述されている。

厦門語の音節末子音は、鼻音の[-m][-n][-ŋ]の三種類があるのと、閉鎖音の[-p][-t][-k]の三種類があるが、廣州の音に似ている。ただ、[-p][-t][-k]は[p][t][k]の部位につくだけ、顕著な破裂を聞こえず、内破音であるにすぎず、本当の外破音ではない。この六個の音節末子音は話し言葉の中では、[-m][-n][-ŋ]の大半は半鼻音[~]に変わる傾向があり、[-p][-t][-k]の大半は、声門閉鎖音の[ʔ]に変わる傾向がある。

一方、詹説では、閉鎖音の音節末子音の発音は弱く、粵方言(廣州)の-p, -t, -kのようにはっきりと聞こえないと指摘した。他の先行研究ではほぼ羅説の見解と一致している。

現代厦門語の音節末子音は上述の[m], [n], [ŋ], [p], [t], [k], [ʔ]の七つであるが、厦門語の鼻母音が音節末子音の[m][n][ŋ]の脱落との関連や、音節末子音の同化作用assimilationなども興味深い問題であり、他の機会では是非述べてみたい。

厦門語の音節末子音の語例を下記のように示す。

am 暗	tam 淡	kam 甘	ham 蚌
an 安	tan 蛋	kan 幹	han 韓
aŋ 紅	taŋ 東	kaŋ 公	haŋ 杭
ap 壓	tap 答	kap 洽	hap 呷
at 遏	tat 達	kat 割	hat 喝
ak 沃	tak 逐	kak 角	hak 蓄
aʔ 鴨	taʔ 踏	kaʔ 甲	haʔ 合

9. 音節主音[m], [ŋ]

鼻音の[m]と[ŋ]は音節主音[m̥]と[ŋ̥]をなすことは、厦門語の特徴である。先行研究では例外なくこの現象についての記述が記されている。ただし、音節主音の[m̥][ŋ̥]と鼻音の[m][ŋ]とは音声的にどう違うかは論じられていない。

厦門語の音節主音の[m̥]と[ŋ̥]の発音はよく観察すると、入破音から鼻音化した[m]と[ŋ]の発音とはやはり違う。前述した通り、[m]と[ŋ]はそれぞれ入破音の[β]と[g]の鼻音化した音であるため、一部の呼気が口腔を通して流れて出ることもあるように、曖昧な鼻音であるのに対して、音節主音としての[m̥]と[ŋ̥]は入破音の鼻音化音ではなく、純粋な通鼻の鼻音である。

厦門語の[m̥][ŋ̥]の語例を下記に挙げる。

[m̥]	咁通	[m̥tʰoŋ]	(だめ)	楊梅	[həiŋm̥]	(山桃)
	賣花姆	[βueʔuem̥]	(花売り婆さん)	花葦	[ʔuem̥]	(薔み)
	媒人	[hɸiŋ]	(媒酌人)			
	黙黙咁做声	[hɸʔhɸʔm̥tsueʔiã]	(黙って声を出さない)			
[ŋ̥]	戲院	[çiŋ̥]	(劇場)	澳門	[om̥]	(マカオ)
	厦門	[em̥]	(厦門)	鴨卵	[aʔiŋ̥]	(鴨の卵)
	黃酸仔雨	[ŋ̥st̚jaho]	(梅雨)	雨毛仔	[hɸm̥ja]	(小雨)

上述の厦門語の子音を付表の「厦門語子音分布表」にまとめることができる。

10. おわりに

以上のように、厦門語の子音体系について、音声を中心に先行研究を踏まえて分析してみた。厦門語の母音の体系や声調の体系などについてはそれぞれ、朱新建1991、『厦門語と日本語の音声の比較』(名古屋大学『人文科学研究』第21号)や朱新建1994、『厦門語と日本語のアクセントに関する一考察』(愛知学院大学教養部紀要第42巻第1号)などで述べたが、まだまだ補足しなければ

ばならないところがたくさんある。しかし、なによりも現代厦門語の音韻体系を論じなければならない。このために更なる調査を重ね、資料を充実させ、先行研究を遺漏無く視野に入れて論を進めたい一心である。

なお、本稿で使用されている音声記号は下記のように原則的にIPAに従っている。

[] : 音声	例: [ɸ] [m]
/ : 音素	例: ɸ/m
[ˈ] : 有気音	例: [tˈ]
[~] : 鼻母音	例: [ãɪ]
[³] : 声調	例: [ni ³ xau ³]
[t̚] : [t]の有声化	例: [t̚a ³]
[i̥] : [i]の無声化	例: [k̚i̥kw]

[付表]

厦門語音節分布表

声母 韻母 MVE	調音法 音素 音聲 調音点	七口	破裂音					入破音・鼻音					側面音・弾き音					摩擦音・破擦音				
			p	p'	t	t'	k	k'	5/m	d/n	g/ŋ	l	c	c'	s	(c)	(c')	s	h	h'		
i (イイ)	i im in ip it ik i?	移音 因英引 邑逸 位	西唇	前唇	齒音	軟口蓋	米 民鳴 猛	齒音	齒音	齒音	齒音	後唇	齒音	齒音	齒音	齒音	齒音	齒音	齒音	齒音		
	ui oi ui?	位 模割	肥 拔	唇 對	唇 對	唇 對	唇 對	唇 對	唇 對	唇 對	唇 對	唇 對	唇 對	唇 對	唇 對	唇 對	唇 對	唇 對	唇 對			
	e e? e?	的 嬰 舌	把 白	皮 ③	茶 啄	堤 宅	家 郭	探 客	馬 麥	妹 脈	裂 苦	藝 月	例	姐 絕	妻 帶	洗 雪	齒 初	齒 切	齒 切			
	ue ue?	括 狹	杯 八	批 批	題 題	替 替	瓜 瓜	漢 漢	賈 賈	裂 裂	裂 裂	裂 裂	裂 裂	裂 裂	裂 裂	裂 裂	裂 裂	裂 裂	裂 裂			
	ue?	狹 狹	八 八	批 批	題 題	替 替	瓜 瓜	漢 漢	賈 賈	裂 裂	裂 裂	裂 裂	裂 裂	裂 裂	裂 裂	裂 裂	裂 裂	裂 裂	裂 裂			
a	a ai au am an ao a? a?	亞 愛 後 暗 安 紅 宿	飽 飽 放 放	飽 飽 放 放	飽 飽 放 放	飽 飽 放 放	飽 飽 放 放	飽 飽 放 放	飽 飽 放 放	飽 飽 放 放	飽 飽 放 放	飽 飽 放 放	飽 飽 放 放	飽 飽 放 放	飽 飽 放 放	飽 飽 放 放	飽 飽 放 放	飽 飽 放 放	飽 飽 放 放			
	ia ia? ia?	野 要 要	餅 餅	餅 餅	餅 餅	餅 餅	餅 餅	餅 餅	餅 餅	餅 餅	餅 餅	餅 餅	餅 餅	餅 餅	餅 餅	餅 餅	餅 餅	餅 餅	餅 餅			
	iam iam? iam?	炎 烟 典 典	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭			
	iat iat? iat?	別 運 運	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭			
	ia? ia?	役 役	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭	鞭 鞭			
o	o ok ok ok ok	馬 恩 恩 王	布 北 旁	普 博 博	都 督 東	土 托 託	姑 各 公	苦 天 孔	茶 木 亡	沙 龍 龍	五 唇 唇	午 良 略	驚 驚	粗 族 索	醋 藥 藥	索 索	索 索	索 索	索 索			
	o o? o?	興 學 學	報 報 報	破 破 破	刀 刀 刀	桃 桃 桃	告 告 告	考 考 考	無 無 無	老 老 老	鐵 鐵 鐵	良 良 良	驚 驚	粗 族 索	醋 藥 藥	索 索	索 索	索 索				
	u un ut u?	宇 宇 宇	書 書 書	淨 淨 淨	著 著 著	唇 唇 唇	唇 唇 唇	唇 唇 唇	唇 唇 唇	唇 唇 唇	唇 唇 唇	唇 唇 唇	唇 唇 唇	唇 唇 唇	唇 唇 唇	唇 唇 唇	唇 唇 唇	唇 唇 唇				
	u?	油 油	油 油	油 油	油 油	油 油	油 油	油 油	油 油	油 油	油 油	油 油	油 油	油 油	油 油	油 油	油 油	油 油				
	u?	油 油	油 油	油 油	油 油	油 油	油 油	油 油	油 油	油 油	油 油	油 油	油 油	油 油	油 油	油 油	油 油	油 油				
甲	甲 甲? 甲?	梅 梅	方 方	長 長	滿 滿	光 光	康 康	閑 閑	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩			
	甲 甲? 甲?	梅 梅	方 方	長 長	滿 滿	光 光	康 康	閑 閑	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩			
	甲 甲? 甲?	梅 梅	方 方	長 長	滿 滿	光 光	康 康	閑 閑	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩			
	甲 甲? 甲?	梅 梅	方 方	長 長	滿 滿	光 光	康 康	閑 閑	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩			
	甲 甲? 甲?	梅 梅	方 方	長 長	滿 滿	光 光	康 康	閑 閑	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩			
乙	乙 乙? 乙?	黃 黃	方 方	長 長	滿 滿	光 光	康 康	閑 閑	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩			
	乙 乙? 乙?	黃 黃	方 方	長 長	滿 滿	光 光	康 康	閑 閑	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩			
	乙 乙? 乙?	黃 黃	方 方	長 長	滿 滿	光 光	康 康	閑 閑	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩			
	乙 乙? 乙?	黃 黃	方 方	長 長	滿 滿	光 光	康 康	閑 閑	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩			
	乙 乙? 乙?	黃 黃	方 方	長 長	滿 滿	光 光	康 康	閑 閑	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩	兩 兩			

注1: 声母Iは(ゼロ声母を除いて)子音(consonant)のことであり、音節初頭子音(Initial)Iと示し、韻母MVEは、Mは音節副音(asyllabic)で、介音(Medial)Mと示し、Vは音節主音(syllabic)で、主音(Principal Vowel)Vと示し、Eは音節主音に後続する音節副音か音節末子音か音節副音+音節末子音かのどれかで、韻尾(Ending)Eと示す。注2: ①～④の記号は該当する漢字が無いことを示す。注3: 破口蓋鼻音の[p]と口蓋化の鼻音[n]は便宜のため、分類せずに鼻音[n]の欄に置く。